

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉

高校版

2017
Volume 5

12月

VIEW21

対話で創る

特集

「学校教育デザイン」を描く④

2校の事例に見る 実践のポイント

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

生物

東京都・私立昭和女子大学附属昭和中学校・高校 山下兼彦

地理

大分県立日田高校 箧島朋子

指導変革の軌跡

青森県立五所川原農林高校

茨城県・私立江戸川学園取手中・高校

広がる世界、広げる世界

生徒 小学生にプログラミングを教える私たちの活動「Programming Of the Kids By the Kids For the Kids.」が5年目になり、今はスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）の課題研究として、企業と共同でワークショップを開催したり、訪問する学校数を増やしたりと、活動範囲はかなり広がりました。

先生 自分たちで訪問先の学校を見つけたり、企業と連絡を取って計画を立てたりする行動力は、正直、先生以上だなど思うことがあります。

生徒 最初はプログラミングが何かすら知らない子どもたちが、最後には自力でゲームを作り「できたよ!」と見せてくれる時にやりがいを感じます。勉強や部活動との両立は大変だけれど、またやりたいと思うんです。

生徒 学校外の人と話す機会がたくさんあるのも、楽しくて刺激を受けています。今までで一番苦労したのは、去年参加したSGH指定校の発表会です。発表は中1から何度も経験していたけれど、あの時の練習では先生からいろいろ指摘されてへこたれそうでした。

先生 初めて参加する公的なSGH発表会だったから、研究の信頼性をいかに高めるか、発表会のテーマに

沿った内容になっているか、厳しく指摘したよね。

生徒 スライドの内容や発表時の姿勢など、見やすく分かりやすく伝える重要性を学びました。ポスター発表もプレゼンテーションも金賞を受賞し、先生から「よく頑張ったね」と言われて、すごくうれしかったです。

先生 審査員から高評価を受けて、みんなで大喜びしたよね。でも、先生としては、発表会でみんなが他校の発表をしっかりと聞いて、先生の予想以上に的確な質問をしていたのがうれしかったな。

生徒 それまで、質問をすると相手の発表が不十分だと言っているような気がしていましたが、実際に自分が発表した後、質問をされると、研究内容に関心を持ってきているんだとうれしくなりました。先生が「質問は相手へのリスペクトだ」と言われていた意味が分かって、それからは相手の発言をしっかりと聞いて質問をしたり、感想を言ったりするようになりました。

先生 授業も大切だけれど、体験でしか学べないこともたくさんあります。SGHの活動はその1つです。みんなが安心して社会に出て、たくさんの多様な体験ができるよう、これからも後押しをしていくね。

杉本紀子先生 教職歴24年。同校に赴任して21年目。主幹教諭。進路指導主事。SGH委員会主任。

東京都・国立東京学芸大学附属国際中等教育学校 全日制／普通科／共学／1学年約130人／2017年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、東京大、京大などに29人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ266人が合格。

2 特集

「学校教育デザイン」を描く④

2校の事例に見る 実践のポイント

4 実践事例

2つの学校が次代を見据えて、 「学校教育デザイン」の構築に着手

4 事例1 千葉県立幕張総合高校

進路・学習指導の体系化を機に、
育成を目指す資質・能力の明確化、教育活動の改善を図る

10 事例2 岡山県立林野高校

「育てたい生徒像」を丁寧に語り合い、
方針、目標へと段階的に具体化

16 実践を振り返って

学校教育目標を実質化し、 高校教育の質の向上に結びつけるために

千葉県立幕張総合高校 教頭 酒井一成、真田信弘 / 岡山県立林野高校 校長 三浦隆志、安東幸信

今月の表紙メッセージ

対話で創る

◎「主體的・対話的で深い学び」に象徴されるように、「対話」は今後の学校教育のキーワードの1つです。昨年末に公表された中央教育審議会の答申に「教員研修自体の在り方を、『アクティブ・ラーニング』の視点で見直す」などあるように、生徒だけではなく教師にも求められているのが「対話」です。本誌の6月号から特集してきた「『学校教育デザイン』を描く」実践においても、実は「対話」が1つのキーワードになっていました。生徒と生徒、生徒と教師、そして、教師と教師の「対話」が多くの気づきや学びを生み、その積み重ねによって新しい学校の姿が創られていくのです。山梨県立吉田高校に続き、今号では2校の実践を一挙に、そしてたっぷりご紹介いたします。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇

20 主體的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

20 生物

東京都・私立昭和女子大学附属昭和中学校・高校
山下兼彦
納得解を追求するグループの学び合いで、
主体的に思考し続ける生徒を育成

24 地理

大分県立日田高校 麓島 朋子
「なぜ?」「どうして?」と問い続け
因果関係を考えさせることで、「地理」の本質に迫らせる

28 指導変革の軌跡

28 青森県立五所川原農林高校

グローバル人材の育成
「GLOBAL G.A.P.」への挑戦を通して、
地域の農業の発展を支える人材を育成

32 茨城県・私立江戸川学園取手中・高校

理数教育
理数融合型の協働学習「メディカルサイエンス」で、
生徒の深い学びを実現

36 改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生 3学期 受験シミュレーションシート

40 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

40 東北大学 工学部 機械知能・航空工学科

国際機械工学コース
世界各国の学生と英語で学び、
世界で活躍する科学者を目指す

42 立命館大学 文学部

「キャンパスアジア・プログラム」

日中韓の3つの大学を移動して学び
東アジアの架け橋となる人材を育成

44 これからの会議・研修のあり方、つくり方

感動・気づきをもたらす講演会

48 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「もっと自分に責任を持って」

静岡県・沼津市立沼津高校・中等部 谷野公彦

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

印刷製本 / (株) 協同プレス 編集協力 / (有) ベンダコ 執筆協力 / 中丸 満、二宮良太
 撮影協力 / 川上一生、田中秀和、福山 哲、ヤマグチイッキ

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

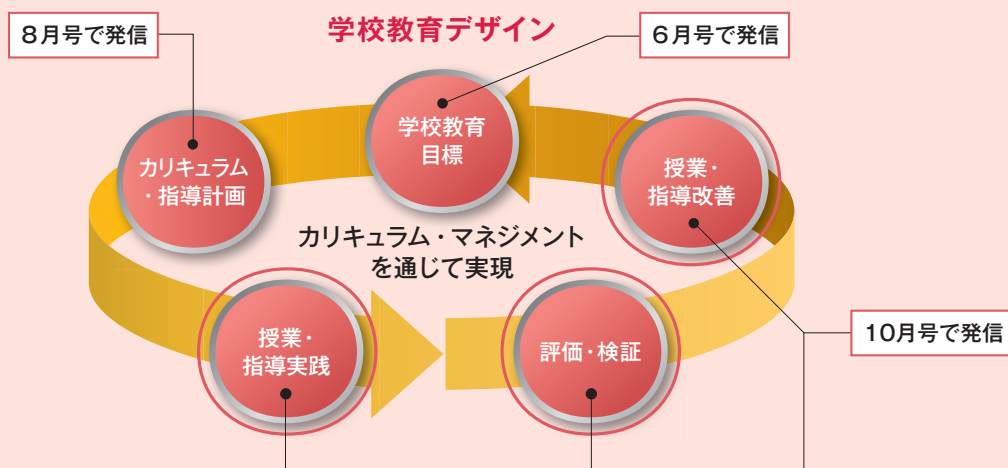
©Benesse Corporation 2017

「学校教育デザイン」を描く④ 2校の事例に見る 実践のポイント

本誌では、6～10月号の3号にわたって、次の自校を創る「学校教育デザイン」を描くために必要な各視点を、具体的な実践例とともに見てきた。それと並行する形で、編集部が密着取材をしてきた2つの学校がある。千葉県立幕張総合高校と岡山県立林野高校だ。いずれも次代を見据え、「学校教育デザイン」を描く取り組みを推進している学校である。今号では、複数回にわたり取材を重ねた2校の実践を一挙に公開し、「学校教育デザイン」を描く上での実践のポイントを見ていく。

2017年 特集の年間テーマ

2020年度・22年度に向けて、次の自校を創るために必要な視点を押さえた「学校教育デザイン」を描く



「学校教育デザイン」を描く2校の実践事例

事例 1 千葉県立幕張総合高校

[P.4～9]

◎生徒も教師も人数が多い大規模校であるため、教育活動や指導が学年単位で行われることが多く、進学実績も学年の色が出やすかった。
 ◎2019年度における進学重視型の総合学科への移行、移行翌年度に実施される「大学入学共通テスト」への対応準備として、17年度の学校の重点目標の1つに「目指す将来像の検討」が掲げられた。

◎「生徒に育みたい資質・能力」について、生徒の実態や指導内容を思い返しなが、参加者全員がリレー形式で述べ、育成を目指す資質・能力の共通理解・認識を図った。
 ◎3年間の指導ストーリーを描くため、各学年の各時期における重点指導方針とそれに沿った教育活動を、学年ごとのグループで話し合った。
 ◎1学年の進路・学習指導に関する各教育活動について、時期・目的・内容などが適切かどうか、ペアで検討した。

◎生徒に育みたい資質・能力「幕総スキル（仮称）」と、それらを2018年度入学生に育むための「1学年 教育活動計画（案）」を策定し、それらを教科を超えて共有できた。また、話し合いを通して、参加した教師に前向きな姿勢が見られた。
 ◎今回の取り組みを全校に広め、各教科の具体的な授業改革や指導改善につなげること、さらに、すべての教育活動を含めた学校教育デザインを描くことが今後の課題。

取り組みの背景

取り組みの主な流れ

成果と今後の展望

事例 2 岡山県立林野高校

[P.10～15]

◎中期教育目標を設定してから4年を迎え、「次の5年間のあり方」を考えるべき時だと、多くの教師が感じていた。
 ◎生徒の進路の多様化や学力の多層化が進み、「学力向上」という教育目標だけでは、指導への意識を学校全体で統一することが難しく、すべての教育活動の軸となる「生徒に育みたい資質・能力」を明確にする必要性が高まっていた。

◎教職員間で自校の強みや弱み、「育てたい生徒像」を何度も語り合い、それを踏まえてミドルリーダーが課題を整理。そこで抽出された言葉を用いて、校長が重点目標を作成。
 ◎ミドルリーダーが「生徒に育みたい資質・能力」につながるキーワードを出し合い、それを基に校長が素案を作成し、さらに教職員全員で検討した。
 ◎教科別のグループに分かれて、1学年の教育課程表に「生徒に育みたい資質・能力」を落とし込んだ。

◎「育てたい生徒像」を基に「生徒に育みたい資質・能力」を整理し、それらを踏まえた各教科・科目の教育課程の検討へと進んだ。また、「生徒に育みたい資質・能力」を自教科に落とし込んで語り合ったことで、その理解が一層深まり、他教科の教師との対話が増えるなど、教科を超えた結びつきが強まった。
 ◎教師の語り合い・検討のプロセスを記録し、それを継承することでさらに協働性を高めることが、今後の課題。

実践を振り返って見えたポイント

[P.16～19]

千葉県立幕張総合高校



「育みたい資質・能力」を外部に発信することで、これからの教育を共有する

教頭 酒井一成



教師に求められる資質・能力を明確にして、それを高める仕組みが必要

真田信弘

岡山県立林野高校



同僚性や各教師の主体性を大切にし、環境変化を的確に捉えて、課題に一つひとつ取り組む

校長 三浦隆志



対話を通してお互いの考えを深め合っていくことで、よりよい方向性を見いだす

安東幸信

2つの学校が次代を見据えて、「学校教育デザイン」の構築に着手

「学校教育デザイン」は、どのような体制や方法、進め方で描いていけばよいのだろうか。学校の規模も置かれた環境も異なる2校による、「学校教育デザイン」を描く取り組みを通じて考えていく。

事例 1 千葉県立幕張総合高校

進路・学習指導の体系化を機に、育成を目指す 資質・能力の明確化、教育活動の改善を図る

2019年度に進学重視型の総合学科に移行予定の千葉県立幕張総合高校。総合学科への移行、並びに大学入試改革への対応に向けて、育成を目指す資質・能力の明確化と3年間の指導の体系化に動き出した。

取り組みの背景

進学実績が好調な今こそ、 次の発展に向けた手を打つ

千葉県立幕張総合高校は、1学年の生徒数が約770人、教師数も総勢180人余りという大規模校だ。生徒も教師も人数が多いため、教育活動や指導は学年単位で行われるこ

とが多く、進学実績も学年の色が出やすいことが課題だった。そうした折、同校が、2019年度に進学重視型の総合学科に移行することが決定した。移行翌年度には「大学入学

共通テスト」が実施されることから、双方の対応準備として、17年度の学校の重点目標の1つに「目指す将来像の検討」が掲げられた。進路指導主事の真田信弘先生はこう語る。

「本校ではここ数年、進学実績が上昇傾向にあり、さらに全国大会に出場する部活動が増えるなど、学校全体が活気づいています。そうした前向きな雰囲気があり、学校と教育

制度が大きな節目を迎える今こそ、本校の今後の発展を考えた将来像を全校で共有し、指導の体系化を図りたいと考えました」

同校は、まず、育成を目指す資質・能力の明確化と、進路・学習指導を中心とした3年間の指導の体系化に着手した。「大学入学共通テスト」を初めて受験する新1年生の入学を約半年後に控え、該当学年の指導計画立案に向けて動き出すためだ。

「本来なら、学校行事や部活動なども含めたすべての教育活動について検討すべきだと思いますが、本校は組織が大きく、一度にすべてを行うのは難しい状況です。そこでまず、大学入試に直結する進路・学習指導の改善から始めました」（真田先生）
17年夏、教頭、各分掌の主任、各

千葉県立幕張総合高校

◎1980年度に千葉県立幕張東・西・北高校の3校が集合形態を採る学校として幕張新都心に設立された後、96年度に総合選択制の高校として統合。2004年度、県立若葉看護高校を統合し、看護科(5年制)が設置される。校訓は「自立自尊・協調親和」。

◎設立 1996(平成8)年

◎形態 全日制/普通科・看護科/共学

◎生徒数 1学年約770人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は筑波大・千葉大・お茶の水女子大・東京外国語大・東京学芸大などに53人が合格。私立大は、慶應義塾大・明治大・立教大・早稲田大などに延べ1261人が合格。

◎URL <https://www.chiba-c.ed.jp/msh/>



千葉県立幕張総合高校
真田信弘 さなだのぶひろ
教職歴31年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。国語科。



千葉県立幕張総合高校
菅田広 すがたひろし
教職歴31年。同校に赴任して9年目。進路指導部。英語科。



千葉県立幕張総合高校
竹林靖浩 たけばやしやすひろ
教職歴31年。同校に赴任して4年目。1学年主任。英語科。



千葉県立幕張総合高校
中山悦夫 なかやまえつお
教職歴28年。同校に赴任して12年目。総合学科部長。理科(物理)。



千葉県立幕張総合高校
榎枝孝洋 えのえだたかひろ
教職歴12年。同校に赴任して5年目。3学年主任。保健体育科。

図1

幕張総合高校の「学校教育デザイン」の流れ

・育成を目指す資質・能力の明確化と進路・学習指導の体系化を目指すし、教頭、各分掌の主任、各学年主任らによる「大学入試対策委員会」を設置

・第1回ミーティング 委員会の趣旨を説明した上で、10月までに、育成を目指す資質・能力の明確化と、3年間の指導ストーリー及び教育活動計画の具体化が目標であることを伝えた(8月)

・第2回ミーティング 「生徒に育みたい資質・能力」について、自身が見てきた生徒や指導内容を思い返ししながら、参加者全員がリレー形式で述べ、育成を目指す資質・能力の共通理解・認識を図った(9月)

・第3回ミーティング 3年間の指導ストーリーを描くため、各学年の各時期における重点指導方針とそれに沿った教育活動を、学年ごとのグループで話し合った(10月)

・第4回ミーティング 1学年の進路・学習指導に関する各教育活動について、時期・目的・内容などが適切かどうか、ペアで検討した(10月)

学年主任ら十数人による「大学入試対策委員会」を立ち上げ、まずは10月までに、育成を目指す資質・能力と進路・学習指導における教育活動計画を検討することとなった。進路指導部の菅田広先生は、その意義を次のように語る。

「大学入試が思考力・判断力・表現力などをこれまで以上に問う入試

ステップ1 「生徒に育みたい資質・能力」を明確化する

育みたい資質・能力を自身の指導に落とし込んで具体的に述べ、共通理解・認識を図る

メンバー全員が語ることでつくり上げる

8月下旬、「大学入試対策委員会」の第1回ミーティングが開かれた。真田先生から、同委員会の趣旨と、10月までの中間目標として、「生徒が在学中、『どの時期』に、『どのようなことを目標』とし、『どう行動』し、それらを『どう評価』し、『どう改善』するかを具体化する『3年間の指導ストーリー』を作成する」と、それをメンバー全員による共同作成とすることが説明された。真田先生

になるならば、我々の授業にも変化が求められます。『大学入試改革については進路指導の担当』という考え方はなく、学校全体で取り組む必要があります。本委員会で教科・学年・分掌を超えて話し合い、物事を決めていくことで、学年別の体制から学校全体で動く体制へと転換する端緒とするねらいもありました」

は、「忌憚のないご意見をいただきたい」「委員会メンバーの先生方全員でつくっていききたい」と何度も伝え、参加者全員でつくり上げるといふ雰囲気づくりに努めた。総合学科部長の中山悦夫先生は、この委員会に期するものがあつたと語る。

「各教科や各分掌などでは、担当者のみが受け継いできた思いや方針なども多くあります。委員会のメンバーは十数人といえ、教科や学年、分掌を超えた形で指導について話すことで、それぞれが持つ情報を共有できます。本校は開校から22年目と

なり、初期の頃と比べて教育を取り巻く環境や生徒の気質も変わってきています。今回の委員会は、これまでの取り組みを整理して、本校が進むべき道を探る絶好のチャンスになると思います」

最後に、次回の検討課題である「生徒に育みたい資質・能力」について、真田先生が同校の「平成29年度学校経営重点目標」の「具体的目標」を基に作成した草案を提示(図2)。それを基に、進路・学習指導に落とし込むとどういった力になるのかを考えることが事前課題として出されて、第1回ミーティングは終わった。

自身の指導を振り返り、育てたい資質・能力を再認識

第2回ミーティングでは、「生徒に育みたい資質・能力」の具体化を通して、その共通理解・認識が図られた。

まず、真田先生が、第1回ミーティングで示した草案をさらに練り、5つの資質・能力にまとめて「幕総スキル」という仮称で提案(図2)。この5つの資質・能力は、担当教科の授業や学習・進路指導では具体的にどのような力・姿勢・態度を生徒

に育むことになるのか、メンバー全員がリレー形式で述べていった。1度の発言は1人30秒以内というルールを設けたところ、多様な指導場面の資質・能力が具体的に示され(図2写真)、委員会のねらいとする共通理解・認識が図られていった。

「主体性」「発信力」「客観視」など、教科や分掌の異なる教師から同じような言葉が繰り返し挙げられたことで、それらの育成の重要性を再認識したと、菅田先生は語る。

「担当教科の英語の授業では、表現力や説得力を育もうとペアワークやグループワークを取り入れていきます。ほかの先生からも同じような発言があり、自分の指導の方向性は合っていたのだと確信できました」
3学年主任で保健体育科の榎枝孝洋先生も、自身の指導を振り返る機会となったと語る。

「保健の授業では、授業を活性化させようとグループワークや発表を多く採り入れていますが、それは発信力や表現力の育成につながっているのだと思いました。多くの生徒にとって入試科目ではない保健体育において、それを学ぶことにより、『何ができるようになるか』を明確化する

図2 「生徒に育みたい資質・能力」案の変化

第1回案

〈2017年度の具体的目標に基づいた案〉

- 1 学習指導 行動力(主体的実行力)、分析力、行動力(工夫力)
- 2 進路指導 挑戦力、傾聴力、分析力
- 3 生徒指導及び特別活動 行動力(自己摂生力)、分析力

社会適応力 自己分析力 創造力 主体的実行力 継続力

第2回案

〈第2回ミーティングのまとめ〉

- 社会適応力
 - 読解力(情報を正しく理解する力)
 - コミュニケーション能力
 - 日常英語力
 - 諸条件に対する対応力
- 自己分析力
 - 復習し分析する力
 - 自己客観視能力
 - 的確な目標設定能力
 - 正しい初期行動
 - 日常生活修正力(記録をつける)
- 創造力
 - 言語化して発信する力(プレゼンテーション力)
 - 的確な目標設定能力(キャリア教育)
 - モチベーションアップ力
 - OA機器を正しく使う能力
 - 英語コミュニケーション能力
- 主体的実行力
 - 自分の行動を他者に説明する能力
 - 自分の現況を理解し自信に結びつける能力
 - 知的向上心
 - 疑問解決能力
 - 授業を主体的に活用する能力
- 継続力
 - 日常思索能力
 - 興味・関心喚起能力
 - 発見力
 - 日常継続力(英語活用・読書・学習工夫)
 - 初志貫徹力(第1希望を諦めない)

→これらの発言から **発信力** に変更

幕総スキル(仮称)

第3回案

- 社会適応力

自分を取り巻く多様な社会をグローバルな視点で正しく理解し適応する力
- 自己分析力

自分の能力や生活を客観的に評価する力
- 発信力

自分の目指す将来像の実現に向けて、必要な能力を明確化させる力
- 主体的実行力

自らの能力を向上させるため、具体的かつ主体的な行動をする力
- 継続力

困難な状況に対し、柔軟な対処ができ、ポジティブな行動を継続させる力

*学校資料を基に編集部で作成

ることは、生徒の学びの意欲を向上させる上でも非常に重要です。授業を通して生徒にどのような資質・能力をつけたいのかを、引き続き教科内で考えていきたいと思えます」

以上のようにして洗い出された資質・能力を基に、草案の「創造力」は「発信力」に変えられ、第3回ミーティングで改めて「幕総スキル（仮称）」として示された。

ステップ2 3年間の指導ストーリーを描く

資質・能力を育むための時期別の重点指導方針を基に、指導の工夫点・改善点を見える化

入り口指導の重要性を再認識

第3回ミーティングでは、第2回ミーティングで具体化した「幕総スキル（仮称）」を3年間でどのような身に付けさせるか、その指導ストーリーを検討した。

千葉県教育委員会に提出した進路指導の年間計画を基に、志望校合格という目標に向けた3年間の各学年

での前期・後期の重点指導方針案を、真田先生が提示（図3）。メンバーは担当学年にかかわらず関心のある学年を選び、その重点指導方針案に対して、まずは個人で「共感するポイント」とその理由「重点指導方針案をよりよくするアイデア」「重点

指導方針案を実現する具体的な教育活動」について考え、それらを付箋に書いて、その後は学年ごとのグループに分かれて議論した（図3写真）。

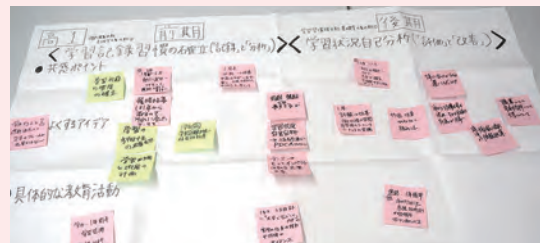
最も多くのメンバーが関心を持った学年は1学年で、次いで2学年、3学年の順だった。1学年のグループでは、主に学習習慣の定着、進路意識の涵養、そして単位制のために行われている履修指導について議論された。

「現在の教育活動の順序について意見が出たり、学習と進路行事の関連性を見直したりと、ポイントとなる指導が見える化されていきました。高校3年間で1年次をいかに有意義に過ごすかが要になると、どの教科の先生も注視していること

図3 3年間の指導ストーリー・重点指導方針案

学年	時期	指導方針
1学年	前期	学習習慣養成期 基礎学力養成期① 学習記録習慣の確立（「記録」と「分析」）
	後期	学習習慣確立期 基礎学力養成期② 学習状況自己分析（「評価」と「改善」）
2学年	前期	前基礎学力養成期③ 後基礎学力完成期① 志望の研究と具体化（得意科目の強化）
	後期	前基礎学力完成期② 後入試基礎力養成期 志望の明確化とその対策の立案（不得意科目の克服）
3学年	前期	入試基礎力完成期 志望実現に向けた対策の具体化
	後期	入試実践力養成期→完成期 入試本番 実力分析とその対策（出願校の決定）

*学校資料を基に編集部で作成



各学年の前期・後期それぞれの重点指導方針を、これまでの指導実績から設定し、それらについて「共感できる点」「工夫点」「具体的な教育活動」「疑問点」を洗い出した。

が分かり、改めて1年次の指導の大切さを感じました」（榎枝先生）

資質・能力の育成には学校全体の視点が必要

最後に、各学年のグループで話し

合った内容を共有。1学年のグループからは、2学期制で指導のスパンを捉えるのではなく、定期考査に合わせて4回に分割する、または3学期制で指導を考えるとといった提案がなされた。2学年のグループからは、中だるみをいかに防ぐかが中心課題であり、徹底的に将来について悩み、

考えさせる必要性の指摘があった。

1学年主任の竹林靖浩先生は、グループワークを通じて、目標を明確に設定し、そこに向けた活動を組み立てていくというプロセスの重要性を改めて感じたと言った。

「担当教科の英語では、CAN・Dオリストを作成し、教科団で指導の目線合わせをして授業を行っていきま。今までも学年主任として、生徒一人ひとりの希望進路の実現という目標に向けて指導を組み立てていきましたが、資質・能力の育成に向けては、学年全体、学校全体の視点を持つべきだと分かりました」

教育活動を共感・違和感の両面から検討し、見直しのポイントを探る

資質・能力や全体計画から見た意見が出される

第4回ミーティングでは、「1学年 教育活動計画(案)」(図4)で提示された各教育活動について、どのような指導で「幕総スキル(仮称)」を育んでいくのかを見える化した。

「教育活動」の中から4項目を選び、2人1組に1項目ずつ割り当て、「共感した部分」「違和感のある部分」、そして「幕総スキル(仮称)」との関係についてペアで意見を述べていった(写真1・2)。

「1学年 教育活動計画(案)」には、「幕総スキル(仮称)」との関連度合いも示したため、指導と資質・能力との関係がより具体的にイメージでき、「生徒に発信力を育むならば、教師の受信力を高めなければならぬ」といった意見も出された。

「生徒に求める資質・能力の裏側には、教師に求められる資質・能力

も隠されていることを、皆が意識できたと思います」(竹林先生)

それまでの議論で「生徒に育みたい資質・能力」や3年間の指導の流れが共有されてきたこともあり、指導全体の中での位置づけを改めて考えて、各教育活動のよい点や疑問点を出し合う姿が見られた。そこでは、「進路LHRでは年間計画を立て、その振り返りを行うのだから、発信力や継続力の育成につながる」「面談で生徒の発信力を★3つ分育むには、もっと工夫の余地がある」など、育成を目指す資質・能力を意識した意見が多く出された。

「各教育活動の『違和感のある部分』では、改善点を示すものや、活動目的を再確認すべきものなど、考えさせられる意見が出てきました。そして、2学期制という枠組みや、ほかの活動とのバランスもある中で、生徒にとって効果のある時期を見計らって教育活動を配置する大切さを改めて感じました」(真田先生)

図4 1学年 教育活動計画(案)

教育活動		幕総スキル(育成を目指す資質・能力)					指導計画	
活動種類	活動名	社会適応力	自己分析力	発信力	主体的実行力	継続力	重点指導方針:学習記録習慣の確立(「記録」と「分析」)	
							4月	5月
学習指導 進路指導	課題テスト 定期考査		★★	★★★	★		課題テスト 入学前課題の学習状況を測る 本校選定テスト	第1回 定期考査 日常の学習定着度を知る 授業担当者作成試験
進路指導	スタディーサポート 校内実力テスト (模擬テスト)		★★	★★★	★		第1回 スタディーサポート 現在の学力・学習状況を測る スタディーサポート	
学習指導 進路指導	テスト 事後分析		★★★	★★	★★	★★★		第1回 スタディーサポート分析 自己学力・学習状況分析 学習記録手帳
進路指導	進路 LHR (理解型)	★★★	★★			★★	年間計画等説明 今年度の進路指導計画を理解する 進路指導部作成資料	センター試験を知る 3年後の入試の仕組みを知る 進路研究企業資料
進路指導	進路 LHR (ワーク型)	★★★	★★		★★★		学習計画を立案 年間の学習計画を立てる 本校作成ワークシート・学習記録手帳	
進路指導	進学講習	★★		★	★★★	★★	進学講習希望調査 希望進路実現に必要なことを考える 進学講習一覧・申込用紙	通年・前期進学講習開始 希望進路実現の能力向上を図る 講座テキスト等
進路指導	進路説明会 キャリア教育	★★★	★★					
学習指導 進路指導	履修指導		★★	★★				本校設定講座の理解 次年度の履修の案を組む 本校作成「履修の手引き」
生活指導 学習指導 進路指導	生徒面談	★★	★★	★★★			コミュニケーション・ウィーク 生徒が現在の状況を理解する 進路指導部作成資料	
進路指導	大学見学 オープン・キャンパス	★★			★★★			オープンキャンパス・大学見学 進学希望校の実際に触れる 進学先資料
進路指導	進路希望調査		★★	★★			第1回 進路希望調査 現段階での希望進路を定める 本校作成進路希望調査用紙	

*学校が作成した「1学年 教育活動計画(案)」を基に編集部で作成



写真1 全員で話し合うと話が拡散しすぎる恐れがあるため、ペアワークにした。また、最後に、ペアワークで出てきた意見を発表し、全体で共有した。

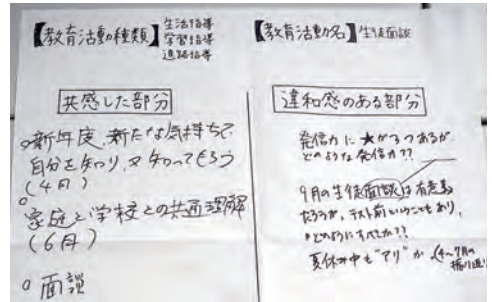


写真2 「共感した部分」「違和感のある部分」というように、プラスとマイナスの両面から意見を出し、改善の方策が具体的に見えるようにした。「この観点は、生徒に物事を考えさせる時にも活用したいと思いました」(竹林先生)

今後の展望

「育みたい資質・能力」の浸透によって、すべての指導改善につなげたい

前向きな姿勢が見られたことは大きな成果

進学重視型の総合学科への移行と大学入試改革への対応に向け、「生徒に育みたい資質・能力」の明確化を図り、3年間の指導ストーリーの方向性と各教育活動の改善点を探ってきた幕張総合高校。育むべき資質・能力が教科を超えて共有できたことは、今後の授業改革・指導改善を進める上で大きいと、菅田先生は感じ

ている。

「授業改革や指導改善は、具体的には各教科で進めていくことになりませんが、初めから教科ごとに検討していたら、方向性がばらばらになってしまったと思います。最初に、各教科が一堂に会して議論する場を設けたことはとても重要でした」

真田先生も、多様な意見を聞くことで進むべき方向性が見えてきたと、取り組みの成果を語る。

「話し合いを通して、先生方の前

向きな姿勢が見られたことは大きな成果です。また、先生方の多様な考えを聞き、深めていく中で、私自身、育みたい資質・能力を強く意識して指導するようになりました」

真田先生は、生徒の発表後に必ず拍手をするようになった。すると、自然と生徒も拍手をするようになり、互いに認め合う雰囲気が出てきたという。

少人数の話し合いから全校に意識改革を進める

今後の課題は、この動きをどのようにしてほかの教師にも広めていき、各教科の具体的な授業改革や指導改善につなげていくかだ。その鍵となるのは、一連の会議の手法ではないかと、竹林先生は指摘する。1回の会議を1時間と決めて延長しないようにし、多忙な中でも参加しやすくした。各回の目標も明確に示し、発言は1人30秒などと区切られたことで、意見を出しやすかったと言う。

「少人数のグループワークは意見を言いやすく、メンバーの意見も聞き取りやすかったです。わずか4回の会議でしたが、たくさんアイデア

アが出されました。そうした小さな場を教科や学年、分掌を超えて設けることで、目標や思いの共有化を図れると思います」(竹林先生)

そうした意識の共有化の先に、教師の意識改革が生まれるのではないかと、中山先生は語る。

「教師が努力を惜しんでいては、指導改善は進んでいきません。必要なのは、私たち教師の意識改革です。『幕総スキル(仮称)』の共有化、3年間の指導ストーリーの立案などを通して、今回のように意見を述べ合っていくことが重要だと、4回の会議を終え、自身の変化を踏まえて感じています」

また、進路・学習指導の取り組みにとどめず、すべての教育活動を含めた「学校教育デザイン」を描いていくことも、大きな目標だ。

「今回は進路・学習指導を中心に検討してきましたが、育むべき資質・能力が学校全体に浸透すれば、授業でも面談でも行事でも、おのずと資質・能力の育成を意識した指導になるでしょう。教師一人ひとりがそうした指導ができるよう、『幕総スキル(仮称)』のさらなる共有を進めていきたいと思っています」(真田先生)

事例 2 岡山県立林野高校

「育てたい生徒像」を丁寧に語り合い、方針、目標へと段階的に具体化

岡山県立林野高校では、2016年度よりカリキュラム・マネジメントの視点での教育活動の改善に取り組んでいる。その特徴は、全校規模での教職員による「育てたい生徒像」の丁寧な語り合いだ。教育活動の軸となる生徒理解を深めながら、管理職と現場、双方の意見を尊重した合意形成を図り、資質・能力ベースでの各教科の教育課程の見直しにまでつなげてきた。

取り組みの背景

次の5年間をつくるために「学力向上」以上の方針が必要

岡山県立林野高校が資質・能力を育むための学校改革に着手したのは2016年度のこと。同校の中期教育目標が設定から4年を迎え、「次の5年間のあり方」を考えるべき時代と多くの教師が感じていたと、主幹教諭の安東幸信先生は振り返る。

「教職員の間で、中期教育目標やその実現のための指導について語られることが少なくなっていました。また、ある学校評議員から『学校経営計画の重点目標が総花的で、学校としての方向性が見えない』と指摘

されたこともありました。今思えば、組織の理念が形骸化していかどうかの瀬戸際だったのかもしれない」

また、近年、岡山県内の公立高校においてもカリキュラム・マネジメント推進の機運が高まってきたが、それは「自校の生徒に身につけさせたい資質・能力」の明確化が各校に迫られることでもあった。事実、教務課長の瀬島美穂先生は、「学力を高め、志望進路を実現する」という教育目標だけでは不十分な時代に

なった」と感じていた。

「進路の多様化や学力の多層化が進む本校の生徒に必要な資質・能力とは何かを、教師全員が明確に語れるようになり、教科はもちろん、学校行事、部活動など、学校における諸活動の軸を定めることが必要だと思うようになりました。ばらばらだった各教師の課題意識を集約し、教育活動の改善に動き始めるべき時期にきていました」（瀬島先生）

そんな中で、16年度より同校に赴任した三浦隆志校長が教師たちに着目して三浦隆志校長が教師たちにこう問いかけた。「本校の生徒に育みたい資質・能力は、どのようなものですか?」。その問いに全員が目線をお互い合わせた上で答えられるようになることを目指し、同校は動き始めた。

岡山県立林野高校

- ◎校訓は「すべては光る 個性の輝き」。課題解決力・コミュニケーション能力など、社会人として必要な能力の育成を目的として、地域をフィールドにした探究活動を「総合的な学習の時間」で展開する。2年次からは、一人ひとりの個性や志望に応じて5つのコースから学習プログラムを選択する。
- ◎設立 1908（明治41）年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約140人
- ◎2017年度入試合格実績（現役のみ）
国立大は、島根大、愛媛大、岡山県立大などに17人が合格。私立大は、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ92人が合格。
- ◎URL <http://www.hayasino-okayama-c.ed.jp/>



岡山県立林野高校校長
三浦隆志 みうら たかし
教職歴34年。同校に赴任して2年目。



岡山県立林野高校
安東幸信 あんどう ゆきのぶ
教職歴29年。同校に赴任して8年目。主幹教諭。地域連携担当。数学科。



岡山県立林野高校
瀬島美穂 せじま みほ
教職歴27年。同校に赴任して8年目。指導教諭。教務課長。理科。



岡山県立林野高校
桐野和也 きりの かずや
教職歴7年。同校に赴任して5年目。数学科。



岡山県立林野高校
川上裕司 かわかみ ゆうじ
教職歴3年。同校に赴任して2年目。保健体育科。

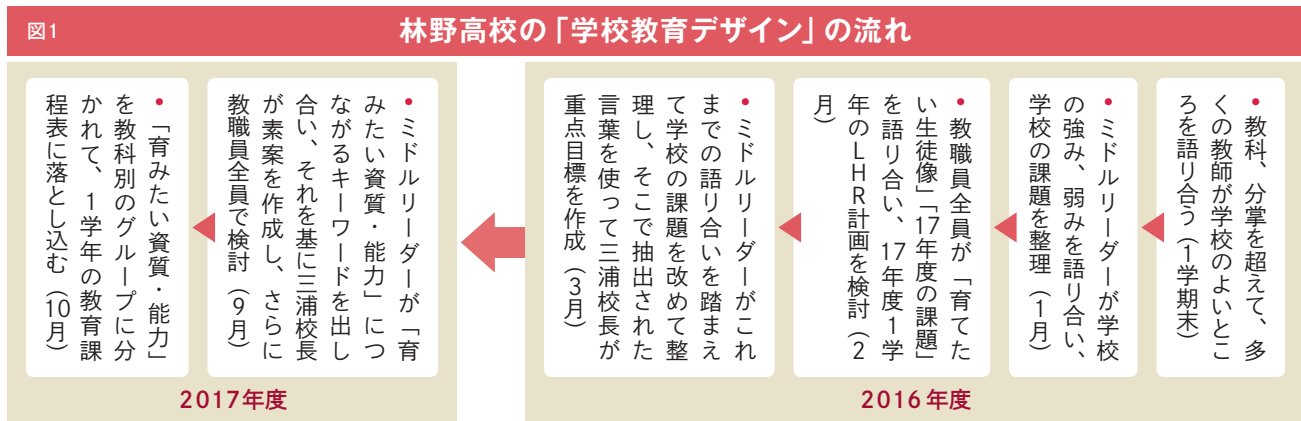


写真1 ミドルリーダーが集まり、学校の現状を整理するために、学校の強み・弱み、学校を取り巻く外部環境におけるチャンスと脅威を洗い出した。

林野高校がまず着手したのは、「総花的」と指摘された学校経営計画の重点目標の見直しだ。そしてそれを、教師一人ひとりが自分事として捉えられるようにするためにも、できるだけ多くの教師がかかわりながら進める必要があった。そこで、三浦校長が最初に行ったのは、「現在の林野高校のよいところを言語化し、共

ステップ1 学校経営計画における具体的な重点目標を設定する

生徒への思いを語り、具体的な「第一歩」を刻む

学校の教育方針を定める ● 2016年度

有していく」という活動だ。

「まずは先生方の気持ちを一つにするため、1学期の終わりに、『1学期を振り返って、よかったこと、2学期にも続けたいこと』を皆で語り合う場を設けました。日々の教育活動の成果に目を向け、自分たちの指導に自信を持つことが、大きな改革を進める上での下地になると考えたからです」（三浦校長）

学校として継続すべき活動、今後も伸ばしていくべき領域に目を向けることで、取り組むべき課題に自信を持って向き合うことができる状態を教師の内面に整えた後、同校は1月から学校経営計画の重点目標の見直しに移った。1月には、ミドルリーダー約15人が集まり、学校の強みや弱みなどを話し合い、学校の現状



写真2 全教職員がグループに分かれて、「育てたい生徒像」を実現する上で鍵になると考えられる項目を挙げ、具体的な打ち手を考えた。学校をよりよいものにするための様々なアイデアを、全教職員が分掌や年齢にとらわれず、熱く語り合った。

を整理する活動を行った（写真1）。「17年度入学生志願倍率が芳しくない状況も把握していましたが、『なぜ、そうなっているのか』『何を解決すればよいのか』を4つのグループに分かれて話し合いました。解決策がすぐに見えてきたわけではありませんが、同じ学校に勤めていても、教科・分掌によって思いや考え方は様々なのだと改めて分かり、

また、自分が見逃していた課題への気づきもありました」（安東先生）

2月には、全教職員が参加し、3時間にわたって「育てたい生徒像」と「17年度の課題」を語り合った（P.11写真2）。三浦校長は、「生きて働く『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう力・人間性等』の資質・能力の3つの柱を踏まえて議論するように教職員に伝えた。それまでの活動を通して、自分の考えを同僚に語ることに対して抵抗感がなくなっていたため、何人も教職員が率先して生徒への思いを熱く語ったという。

「議論を机上にとどめないために、『育てたい生徒像を踏まえて、17年度の1学年団に1学期のLHR計画を提案する』という具体的な課題も盛り込みました。学校の課題に立ち向かえる組織開発の具体的な一歩になったと手応えを感じました」（三浦校長）

教師の言葉を盛り込み 重点目標を練り上げる

3月には、17年度の学校経営計画における重点目標の設定へと進んで

いった。1月からの一連の議論の「まとめワーク」と位置づけて、再度、ミドルリーダー十数人が集まり、重点目標を立てる上で必要なキーワードを洗い出した。キーワードは一つひとつ付箋に書き出し、それらをグループピングしてカテゴリー名称をつけていった。そして、そのカテゴリー名称は、17年度の重点目標設定における重要な柱となった。

最終的には、学校や地域の現状と課題、「育てたい生徒像」を踏まえて、三浦校長が重点目標として整理し、全教職員に提示した（図2）。

「三浦校長から提示された重点目標には、教職員同士で語り合った時に出てきた言葉が盛り込まれていました。教職員がお互いの思いや考えを知った上で、一歩を踏み出す方向性を共有できたという納得感がありましたし、自分が何をすべきかが整理できました」（瀬島先生）

林野高校においても「これまで、学校経営目標などは、自分に関係のある項目しか目を通していなかった」と打ち明ける教師は少なくなかった。だが、対話の中で生まれた言葉を使って、端的に語られる17年度の重点目標には、全教師が分掌を

超えて細部まで目を通すことができた。

「1年前、重点目標を『総花的だ』と指摘した学校評議員も、『学校として何をしたいのかがはっきり分かるようになりましたね』と評価してくださいました」（安東先生）

17年度の学校のあり方を語り合う活動からは、桐野和也先生、川上裕司先生のような若手に、教師としての自信を育む成果も得られた。

「先生方と語り合う中で、自分のこれまでの指導にはそういう意味があったのだと理解が深まる瞬間が何

度もありました。今後の学校のあり方について語りながら、過去を冷静に振り返り、自分に対しても自信を深める貴重な体験ができました」（桐野先生）

「最初、三浦校長に『生徒にどんな力をつけたいか』と聞かれた時は、自分が何を問われているのかが分かりませんでした。でも、今は、学校の重点目標を踏まえて、生徒にどんな力をつけたいのか、保健体育科の1人として自信を持って答えられます」（川上先生）

図2

17年度の具体的な学校経営目標・計画

生徒

- 1 授業や学習方法を改善する取組を通じて、生徒が学び続ける力を身につける。【教務、進路指導】
- 2 学校行事や部活動や社会貢献活動などを通じて、生徒が主体的に取り組む力を身につける。【生徒】
- 3 ESDの視点からグローバル人材養成の取組を通じて、広い視野と豊かな心を身につける。【教務】
- 4 体系的な指導体制を通じて、生徒が主体的に自らのキャリアを形成し、目標を実現する。【進路指導】
- 5 個々の生徒の心身の充実を図り、生徒の自己肯定感があがる。【生徒、厚生】

教職員

- 6 創立110周年の準備を進めるとともに、将来の林野高校を構想する準備を始める。
- 7 開かれた学校づくりを進め、学校の魅力を、中学生やその保護者、地域の方々へ効果的に発信する。
- 8 長期的視野に立って、ミドルリーダーを中心とした組織的な学校運営により、教職員が円滑かつ効果的な教育活動を展開し、組織開発を進める。

*学校資料を基に編集部で作成

ステップ2 方針を教育目標に落とし込む・2017年度

教育目標を資質・能力ベースで整理。 各教科の指導へつなげる

資質・能力の形で 教育目標を言語化する

学校経営計画における重点目標をより学校や地域の実情に合った形に見直したことで、教師たちの内面に「学校全体の方針を授業に落とし込むこと」、授業が今まで以上に生徒に合ったものになるのではないかとといった期待感がおのずと高まってきた。

「17年度の重点目標を生徒に伝えるべき一番の場は、言うまでもなく授業です。しかし、HR活動や部活動に比べると、授業には学校全体の方針をそのまま落とし込みにくいのも事実です。そこで、学校教育目標を資質・能力の形で定義して、カリキュラム・マネジメントの視点で各教科に落とし込み、それぞれの指導計画を立てていきたいと考えました」（三浦校長）

17年9月、学校教育目標を「生徒に育みたい資質・能力」ベースで教

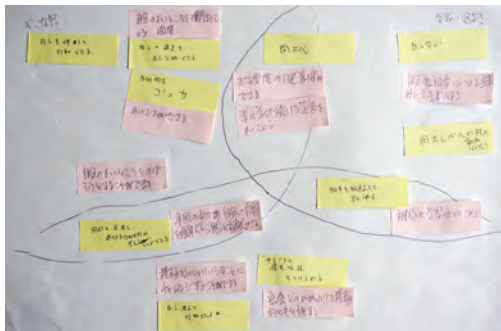


写真3 「育てたい生徒像」を考えられるだけ書き出してから、思考ツールのYチャートなどを使って整理していった。

職員全員が語れるようになることを目的に、まずはミドルリーダーを対象にした2日間の活動が行われた。本誌6月号・8月号特集で取り上げた学校教育デザイン策定の実践事例（山梨県立吉田高校、広島県立尾道北高校など）にミドルリーダーが目を通した上で、まず1日目に、それぞれが「育てたい生徒像」をキーワードの形で書き出してから、グループに分かれてキーワードを分類した（写真3）。そして2日目には、「育

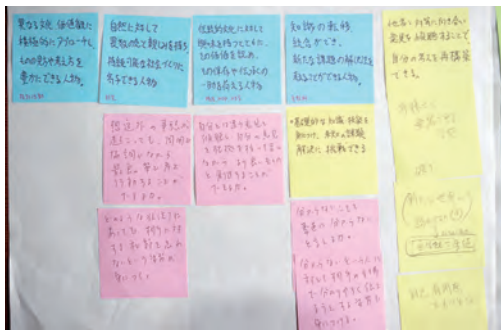


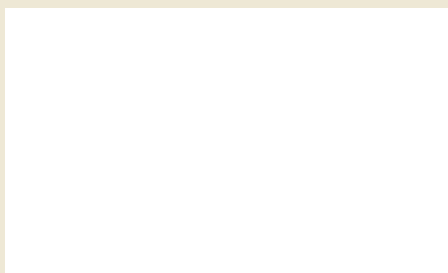
写真4 「～な場面、～ができる」といった表現になるように意識しながら、自校で育みたい資質・能力を考えていった。

てたい生徒像」は、資質・能力ベースにするどのような言葉で表現されるのかを考えていった（写真4）。「2日間の活動を通して、『学び続ける』『他者を承認する』『自己肯定感を持つ』など、普段の学校生活の中で本校の教師が大切にしている言葉が浮かび上がってきました。そこで出てきた言葉を基に、『育てたい生徒像』を資質・能力ベースどのように記述するか、私がたたき台（P.14図3）を作った先生方に提示しました」（三浦校長）

たたき台を教職員に提示する際、三浦校長は「先生方の中にはこの学校が長年何を大切にしてきたのか、私よりもよく知っている方も多い。

16年度の校内議論を生かし、 「生徒の対話の場」を 17年度新入生に提供

林野高校では、16年度末、学校経営計画における17年度の重点目標を検討する過程で、「17年度の1学年団に提案するLHR計画」を練り上げた。その計画は17年4月、新入生に対して120分間の学年企画として実施された。入学したばかりでまだお互いのことをよく知らない生徒同士が、気軽に語り合えるテーマから高校生活の夢や期待などへと語り合いを深め、最後に高校3年間をどのように過ごしたいかを各自宣言することで、進路選択や教科学習に主体的に取り組む素地を養った。



仲間と夢や希望を語り合うことで、「目標実現を支える関係づくり」が意識される。今後のHR活動に生かしてもらうことも、ねらいの1つだった。

図3

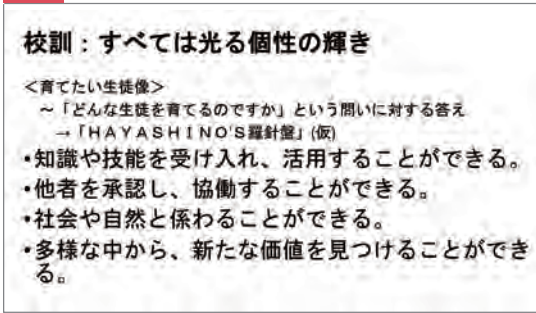


図4



教職員から出された意見を基に三浦校長が素案を作成(図3)。三浦校長作成の素案をたたき台にして、教職員が意見を出し合い、「育みたい資質・能力」を言語化した(図4が完成版)。

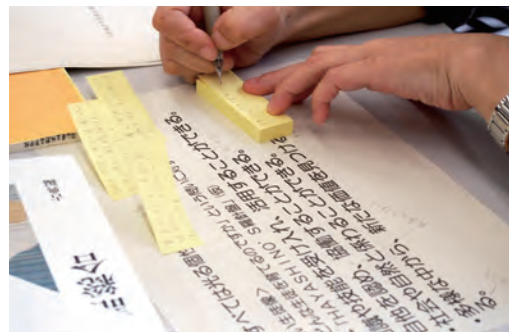
ぜひ、率直な意見を聞かせてほしい」と訴えた。

「『育みたい生徒像』を資質・能力ベースで語ることは、本校にとって初めての挑戦でした。言葉は時として大きな影響力を持ちます。だからこそ、歴代の校長、そしてずっと本校で働いてきた先生方の思いも受け継ぐような言葉で、『生徒に育みたい資質・能力』を語れるようにしたい」と思い、先生方に「意見をください」とお願いしました(三浦校長)。

自分の思いや考えを語り合える文化が教職員の中に育まれたからだろうと三浦校長は評価する。

授業改善のポイントが次々に見えてくる

10月には、自校に合った言葉で明確化された「生徒に育みたい資質・能力」を、教科指導に落とし込むための活動が行われた。各教科の文脈で捉えた、育成を目指す資質・能力の明確化、そして評価の観点に基づき、いつ、どのように指導するのか、18年度1年生の教科書を見ながら教科別のグループで語り合い、教育課



学校教育目標として育成を目指す資質・能力が、自分の教科・科目では「何ができるようになる」ことかをまずは一人ひとり考え、その結果を付箋に書き出すなどしていった。

程表のフォーマットに記入した(図5)。

「育みたい資質・能力」を、自校の生徒に合った言葉や教科・科目の文脈で言語化することは決して容易なことではない。それは同校の活動においても同様だった。例えば英語科では、動物を題材に取り上げた単元で育みたい資質・能力が、「生き物の生態を理解する」といった記述でとどまっていた。しかし、教科団での話し合いが進むと、「自然と人間の共存を題材に、相反する事項をどのように両立させるか、論理的に思考できるようにする」といったレベルまで高めることができた。「育みたい資質・能力」の言語化



一人ひとりが考えたことを教科団で共有する。それを基に、各教科・科目の各分野・単元で、「何ができるようになる」ことを目指すのかを、具体的に語り合った。

は、簡単ではないからこそ教師の協働が不可欠であり、そして協働があるからこそ、教師の中の気づきが極めて多彩になるのです(三浦校長)。「育みたい資質・能力」の言語化が進むにつれて、授業改善のアイデアが次々に飛び出してきた。例えば、保健体育科では、育成を目指す資質・能力を意識すると、ゲームを楽しんだり、記録を競ったりするだけではなく、他者評価を取り入れるなど、従来にはない指導案が生まれた。また、「教育課程表に書き込みながら学習指導要領を見た時に、そこに書かれてある言葉が今まで以上に自分事として心に響いたことに驚いた」といった声も上がった。

図5

数学の教育課程表

分野・単元	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
育成を目指す資質・能力	数と式	集合と命題	二次関数	図形と計量	データの分析	式と証明						
知識や技能を身につけ、活用することができる。	二次の乗法公式及び、因数分解の公式の理解を深め、式を多面的に見たり、目標に応じて変形したりすることができる。	集合と命題に関する基本的な概念を理解することができる。	二次関数の値の変化についてグラフを用いて考察したり、最大値や最小値を求めたりすることができる。	正弦定理や余弦定理について理解し、それらを用いて三角形の辺の長さや角の大きさを求めることができる。	四分位偏差、分散、標準偏差など統計の基本的な考えを理解することができる。	三次の乗法公式及び、因数分解の公式を理解し、それらを用いて式の展開や因数分解をすることができる。 整式の除法や分数式の四則演算について理解し、簡単な場合について計算することができる。 二次方程式の解の判別及び、解と係数の関係について理解することができる。 因数定理について理解し、簡単な高次方程式の解を因数定理などを用いて求めることができる。						
自己や他者を認め、協働することができる。		集合と命題に関する証明を論理的に扱うことができる。		三角比を平面図形や空間図形の考察に活用できる。	データの傾向を理解し、説明することができる。	等式や不等式が成り立つことを、それらの基本的な性質や実数の性質などを用いて証明することができる。						
見通しをもって社会や自然とかかわることができる。	不等式の解の意味や性質を理解し、事象の考察に活用できる。		二次方程式の解と二次関数のグラフの関係を理解できる。	鋭角の三角比の意味と相互関係を理解できる。	散布図や相関係数の意味を理解し、それらを用いて2つのデータの相関を把握できる。							
多様な中から新たな価値を見いだすことができる。	数を実数に拡張する意味が理解できる。		事象から二次関数で表される関係を見いだすことができる。	三角比を鈍角まで拡張する意義が理解できる。		数を複素数まで拡張する意義を理解することができる。						

*学校資料を基に編集部で作成

今後の展望

育成を目指す資質・能力を軸に
教職員のチーム化を進める

検討のプロセスを記録しながら、協働性を高めていく

「育てたい生徒像」から育成を目指す資質・能力を整理し、それらを踏まえた各教科・科目の教育課程の検討を進めてきた林野高校。学校としての今後の方向づけを行ってきたわけだが、その成果は個々の教師の意識の変化にも見られる。

「育成を目指す資質・能力を自教科に落とし込む形で語り合ったことで、授業の合間など、ちょっとした時間での先生方との会話の質が変わってきたように感じます。経験の浅い私ですが、何を目標にどのような指導をするのか、少しずつですが、具体的に他教科の先生方とも話せるようになってきました」（川上先生）

教科を超えた結びつきの強まりは、桐野先生も感じているという。

「今後は『総合的な学習の時間』の開発においても、教科の枠を超えた連携を図っていきます。2年にわ

たった教職員間の協働は、様々な面でプラスに働くはずですよ」（桐野先生）

安東先生、瀬島先生も、「今回の一連の活動を通して、教師がねらいや思いを共有しながら指導力を高め、それを若手に引き継いでいくことの大切さを改めて感じた」と、教師間の協働の大切さに言及する。そうした言葉を受けて、三浦校長は、「協働が大切だからこそ、検討の過程を形に残すことが重要だ」と説明する。

「カリキュラム・マネジメントの進め方は学校によって異なるため、こうすればよいという正解はありません。不断の見直しが必要だからこそ、『育てたい生徒像をこのように捉え、あるべき指導をこのように考えてきた』といった記録を残せば、以降の見直しはスムーズに進むと思います。そして、教職員の語り合いの記録は、次年度以降にも生きる財産になるはずですよ」（三浦校長）

学校教育目標を実質化し、 高校教育の質の向上に結びつけるために

資質・能力ベースでの学校教育目標の明確化や、資質・能力を育むための教育課程、または教育活動計画の策定に取り組んできた千葉県立幕張総合高校と岡山県立林野高校。取り組みを通じて、どのような成果や気づきが得られ、自身や学校にどのような変化がもたらされたのか、2校の教師がお互いの取り組みを振り返り、語り合った。

教師同士が協働して 教育目標を考える意義

編集部 今回のお取り組みを振り返って、よかった点、改善点を教えてください。

酒井 私たち教師は、ともすれば日々の業務に追われ、お互いにじっくりと夢や理想を語り合う機会がなかなか持てません。今回、先生方が集まって教育目標から見つめ直すことで、先生方がどのような見識や課題意識、ビジョンを持っているのかわかることができたのは、新鮮な驚きでした。こういった機会を設けて、先生方のアイデアをどんどん吸い上げていくことが大切だと改めて感じました。今回の取り組みは、ま

ずはやってみようというところから始まったものでしたので、今後はこれを学校の組織的な取り組みとして位置づけ、その成果を学校経営や組織改革に生かすプロセスを検討する必要がありますと考えています。

真田 どの教科の先生も1年次の基礎固めが課題だと認識していることが分かったのは、1つの成果だと思います。ただ、幕張総合高校には180人余りの教師がいる中で、今回のプロジェクトは十数人の委員だけで進められました。今後は委員を増やしたり、勉強会を設けたりして、活動の輪を広げていきたいと思っています。批判や異論にも広く耳を傾けながら、さらに豊かなものにしていくことが必要だと考えています。

三浦 最初は本当に本校にできるのだろうかという思いがありました。本校は6年ほど前に、生徒指導の面で課題を抱えた時期がありました。志願倍率は0.6倍まで下がり、先生方は生徒指導に追われました。先生方の努力が実り、今は志願倍率も回復しましたが、本校の指導スタイルが確立している中で、新しい教育目標をつくるということが、果たして可能なかという点に若干の不安がありました。しかし、先生方はしっかりと取り組みの意図を理解し、意欲的に取り組んでくれました。

そして、先生方の思いを取り込みながら、本校の目指す方向性、生徒に身につけさせたい資質・能力を形にすることができたのは、大きな一歩

だと思っています。本校は中山間地域にあつて、確実に少子化が進行しています。地域の進学校としてどのように生き残っていけばよいのかということ、先生方も意識していたのではないのでしょうか。

安東 教師個人ではなく、職員が集まって意見を出し合い、1つのものでつくり上げていったこと自体に意義があつたと考えています。どの先生方も生徒の力を伸ばしたい、学校をよくしたいという思いを持っています。対話によってお互いの考えを深めていくプロセスを通して、本校ではどのような資質・能力の育成を目指すのかという方向性を共有することができました。反省点は、ワークショップの日程を計画的に設定で



千葉県立幕張総合高校

実践内容は P. 4～9 参照

進路指導主事

教頭

真田信弘

さなだ・のぶひろ

教職歴 31 年。

同校に赴任して 10 年目。

酒井一成

さかい・かずなり

教職歴 33 年。

同校に赴任して 2 年目。

岡山県立林野高校

実践内容は P.10～15 参照

校長

主幹教諭

三浦隆志

みうら・たかし

教職歴 34 年。

同校に赴任して 2 年目。

安東幸信

あんどう・ゆきのぶ

教職歴 29 年。

同校に赴任して 8 年目。

きなかつたので、先生によっては参加できない日があったことです。議論のつながりをすべての先生方と共有し、今の取り組みがどこへつながつていくのかという見通しを示すことができれば、さらに議論が深まったかもしれません。

教育目標を「絵に描いた餅」にしてはいけない

編集部 お取り組みを通じて、ご自身や周りの先生方、生徒が変わったと感じる点がありますか。
安東 校訓や教育目標が「絵に描いた餅」

た餅」であってはいけないということ、教職員にとってなくてはならないものだとすることを、改めて実感しました。今回の取り組みがなければ、教育目標を咀嚼して自分の課題として受け止め、日々の指導に生かすといった発想は得られなかったでしょう。会議での先生方の発言を聞いても、資質・能力ベースで考える習慣が身につけている様子がかがえ、「育てたい生徒像」が浸透していることを感じます。生徒の意識にも、今まで以上にチャレンジする姿勢が見え始めています。教師の目指す方向性を、生徒もおぼろげながら感じているのかもしれませんが、**酒井** 学校の教育目標はたかさんの先生方の思いや地域の期待を反映するので、網羅的・抽象的にならざるを得ない面があります。私自身も、「育てたい資質・能力」を考えるワークショップを通じて、どの取り組みが教育目標のどの部分に結びついていくのかということを実感できるようになりました。生徒の力を伸ばしたり、つまずきを取り除いたりする日常の教育活動の背景に、校訓や教育目標があるということを意識し始めた先生方も多かったと思います。

真田 私は、授業や部活動の時間、進路指導主事として会議をしている時など、あらゆる活動の中で、常に「幕総スキル(仮称)」の5つの力(P.6 図2 参照)を意識するようになりました。同時に今回の成果を、今後本校に長く勤務するであろう若手教師や中堅の先生方に継承していくことも必要であると考えようになりました。今回の成果を学校の資産として受け継ぎ、発展させていく方策を考えていきたいと思っています。
三浦 私は本校に赴任するまで、主幹教諭や管理職として改革に取り組んできました。そのため、改革の工程を自分でデザインし、周囲を引っ張りたいという思いがありますが、今回は前面に出過ぎないように心がけました。私の考えを強く押し出さず、先生方の主体性の発揮を待てるようになったことが、管理職としての私自身の成長だと感じています。
ビジョンを持った人材を抜擢しのびのびと力を発揮させる
編集部 学校改革を通して管理職やミドルリーダーが果たすべき役割とは、どのようなものでしょうか。

酒井 教頭の役割の1つは、学校の

最高責任者である校長と、他の教師をつなぐことだと考えています。先生方が持つアイデアやモヤモヤ感を整理し、私自身の課題意識と併せて、校長に報告する。あるいは、校長のビジョンを受け止めて具体化する方策を考え、教職員に伝えて理解を得る。さらに、強い意志やビジョン、人を動かす能力を持った人材を抜擢し、のびのびと力を発揮してもらおう環境を整えることも、教頭の大事な役割です。そういった人材を見つける上で私が大切にしているのは、その人の周りにどのような人が集まっているのかという点です。どんなに優れたビジョンやアイデアを持っているか、その先生自身に人を引きつける魅力や他の先生を動かす発信力がなければ、改革は前に進みません。

三浦 校長がすべて牽引しているという感覚を先生方が抱いてしまう



同僚性や各教師の主体性を大切にし、環境変化を的確に捉えて、課題に一つひとつ取り組む

三浦隆志



対話を通してお互いの考えを深め合っていくことで、よりよい方向性を見いだす

安東幸信

と、先生方の主体性は薄れ、改革を自分事と考えなくなる恐れがあります。特に、本校のように教職員40人足らずの小規模校では、校長としてリーダーシップを発揮しつつ、先生方との同僚性を大切にして、学校の課題に一つひとつ取り組んでいくことが大切です。その上で、今回の高次接続改革のような大きな環境変化を的確に捉え、現状の把握と改革の実行を並行して速やかに進めることが必要です。よく「赴任1年目は様子見」と言いますが、2年目になると突然改革を進めようとするれば、現場の先生方は「去年は前年踏襲でよ

かったのに、なぜ？」と困惑してしまい、改革に共感を得られません。

安東 学校教育は、ともすれば前年踏襲に陥りがちです。しかし、生徒は毎年変わりますし、先例をなぞるだけでは、激しい環境変化に対応できない場面も出てくるでしょう。ミドルリーダーとしては、定番の取り組みについても、その目的や方法が正しいのか常に批判的に見つめ、関係分掌と連携を取って取り組みの意義を確認・共有し、必要ならば新規の提案を考えてもらうことも求めます。時には負担をかけてしまうことを前提にお願いする場面もあります。が、率直に互いの思いや考えをぶつけ合うことで、よりよい方向性を見いだすことができると思います。

真田 ミドルリーダーの役割は、現場の先生方の考えを大切に受け止める、管理職の意向を確認して、適切な判断をすることです。たとえ自分

の考えとは違っていたとしても、それを自分なりに解釈し、現場の教師と共有していかなければなりません。そのためには、安東先生がおっしゃったように、生徒指導部や特活指導部など各分掌長の先生方と方向性を共有し、協力体制を築くことが大切です。

外的変化が教師の改革意欲に火をつける

編集部 今回、学校全体で改革を進めていく上でポイントになったのは何でしたか。

三浦 本校では、事務室の職員が協力的だったことが大きかったと思います。教師側の意向を受けて様々な配慮をしてくれましたし、昨年のワークショップでは事務室の職員も参加し、行政の見地からの意見を聞くことができました。事務室の職員に支えられているということを実感できたことも、先生方のエネルギーになったのではないのでしょうか。

酒井 本校は、2019年度から進学重視型の総合学科に移行する予定があり、一方で特別支援教育への対応も喫緊の課題です。環境変化に慌

てふためくのではなく、変化を契機にして自分たちがやってきたことを見直し、教育目標の明確化やその実現に少しでも近づいていく努力をすることが大切な時期に来ていると感じています。そうした本校ならではの外的要因が、先生方の意識を高めた面もあったと思います。

三浦 それぞれの学校が直面する課題に取り組むための方策を考え、次につなげていくことを繰り返すことにより、職場の雰囲気も前向きなものとなり、新しい意見も出てくるようになる。そうして、次の改善に結びついていくのでしょうか。PDCAサイクルを回そうと構えてしまふとかえって難しくなりますが、先生方の主体性が高まれば、おのずとPDCAサイクルは回っていくのだと思います。

高校教育の質保証を 真剣に考えるべき時

編集部 今回の取り組みを、今後の学校改革や教育活動の改善にどのようにつながりたいとお考えですか。

酒井 今回、本校で育成を目指す資質・能力を明確化できたので、それ

を外部に向けて発信していきたいですね。幕張総合高校ではこのような資質・能力を育むことができる、卒業後はこのような活躍の道が開かれるということを力強く宣言していけば、本校の魅力がさらに広く外部に伝わるはずですよ。本校の特色の一つとして発信することで、先生方が足並みをそろえて方向性を共有でき、きっかけにもなると期待しています。

真田 生徒に求める資質・能力を明確にした以上、それを育む教師の資質・能力も明らかにする必要があります。生徒の資質・能力がどれだけ向上しているのか、教師はきちんと評価してアドバイスし、次の取り組みに生かしていく、指導のPDCAサイクルをきちんと回していかねばなりません。そのためには生徒だけではなく、私たち教師に求められる資質・能力も明確にし、それを



教師に求められる
資質・能力を明確にして、
それを高める仕組みが必要

真田信弘



「育みたい資質・能力」を
外部に発信することで、
これからの教育を共有する

酒井一成

高める仕組みを考えていく必要があると思います。

安東 林野高校では、グランドデザインを18年度1年生のカリキュラムに落とし込み、運用することが当面の目標になります。その後、2・3年生と順次、形を整えてPDCAサイクルが回るように工夫していくつもりです。持続可能なものにしていくためには、まず、私自身が率先して取り組みを推進し、三浦校長の負担を減らすことが必要だと思います。ただ、1人では限界がありますので、多くの先生方を巻き込みながら、しっかりと連携できる体制を整

えていきたいと思っています。

三浦 取り組みを継続していく上で大切なのは、型にはめてしまわなことです。決められたことだけをしているのは簡単ですが、それではルーチンワーク化してしまい、いずれは学校の停滞を招くでしょう。ルーチンワーク化しないように注意しながら、若い世代の先生方にバトンをタッチしていくことが、これからの私の役割になると思います。

今後は高校も、「育みたい生徒像」を明確にし、大学のようにディプロマポリシーやアドミッションポリシーとして打ち出すことが求められるでしょう。どのように高校教育の質保証を果たしていくのか、それをいかに大学入試や卒業後の学びに結びつけていくのかという視点が、ますます大切になるはずです。

編集部 本日はありがとうございました。



授業アンケートの結果や、「自分の参考書」(P.22 参照)のよい例などを掲載した「BB通信」を配布。次に、前時の振り返りから、クラス全体で共有したい生徒の声として、「当たり前だと思っていたことを説明するのが難しかった」を紹介。「人に教える場面では、自分が本当に理解しているのかが分かる」とグループワークの意義を改めて伝えた。

授業
ハイライト

●2年生「生物基礎」の授業で、単元は「遺伝子とそれはたらき」。授業時間の半分はグループ内での質疑や議論を行い、遺伝情報の分配や遺伝子の発現、タンパク質の合成といった遺伝子とそれはたらきについて理解を深める。(P.23に授業デザインを掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

生物

納得解を追求する
グループの学び合いで、
主体的に思考し続ける生徒を育成

山下先生のアクティブ・ラーニング

グループワークの質を転換し、
「社会人基礎力」を育成

山下兼彦先生は、10年ほど前に教科書の内容の定着を図るプリントを作成し、グループで取り組む学びを取り入れた。一斉授業に比べて、学習内容への理解には深まりが見えたが、まだ資質・能力の育成は意識していなかった。

「昨年、他校の『社会人基礎力』の育成を図



東京都・私立
昭和女子大学附属昭和中学校・高校
山下兼彦 やました・かねひこ

教職歴 25年。同校に赴任して26年目。
進路指導部。
アクティブ・ラーニングの実践は1年目になる。

昭和女子大学附属昭和中学校・高校

◎学園目標は「世の光となろう」。認定こども園から大学院まで同じ敷地内にある。本科・グローバル留学・スーパーサイエンスの3コースを設置。2014年度に文部科学省「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」の指定を受け、グローバル教育に力を注ぐ。

◎設立 1920(大正9)年

◎形態 全日制/普通科/女子校

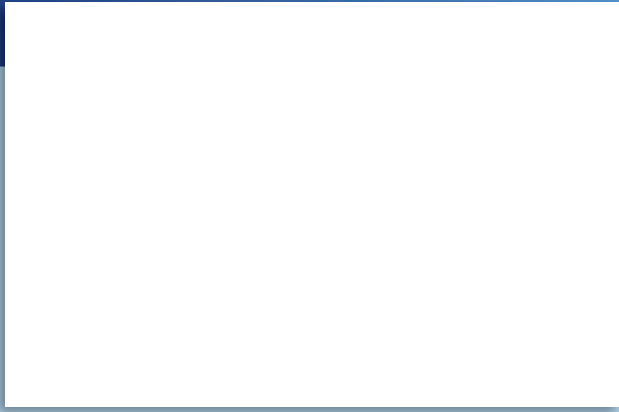
◎生徒数 1学年約220人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ)

国立大は、東京学芸大、東京藝術大、京都大に3人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、早稲田などに延べ244人が合格。

◎URL

<https://jhs.swu.ac.jp/>



自由に机を並べてグループワークを開始。基礎課題が終わったグループから、発展課題に取り組む。机間巡視で、多くのグループが考えあぐねている点があると気づき、先生は「成長段階に応じて必要なタンパク質が変わる」というヒントを板書。



友人の意見を聞いて、考えが広がります。以前に学んで忘れてしまったことを、遠慮なく質問できるのも助かります。



本時の2つの目標を読み上げ、既習事項を振り返り、グループ内での話し合いの材料となる知識を提示。教材の図をスクリーンに映し出し、「これが何を意味するか、説明できるようになりましょう」と、山下先生。そのためには、「遺伝子の発現」「だ腺染色体」「パフ」の3つがキーワードになると伝えた。

『生物基礎』の授業を見学し、自分には無かった視点だと大きな衝撃を受けました」

そこで、山下先生は、教師が極力説明せず、グループで主体的に議論して概念を形成する学びを通し、「社会人基礎力」の3つの力である「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を育てたいと考えた。こうして、2017年度に授業スタイルの転換を図ったのだが……。

「生徒は楽しんでくれるだろうと思ったのですが、『先生が何も教えないのはおかしい』と、猛反発を受けました。その声を聞いて、生徒は模範解答を正確に再現して、点数を取る学びに慣れ切っているのだと気づきました」

まず生徒の意識変革が必要だと考え、「B B (Basic Biology) 通信」を発行し、アクティブ・ラーニング(以下、AL)の意義や効果を示して説明。生徒は徐々に意図を理解して授業を受け入れ、前期の中間考査を迎えた。

「定期考査の難易度は、平均点が70点程度となるよう設定していますが、この中間考査では80点近い平均点になりました。生徒は授業の効果を実感し、さらに意欲的になっていきました」

思考の活性化・深化への配慮

精読による内容理解が 思考を広げる支えになる

山下先生は、各単元を「授業」「実験」「自分の参考書作り」の3要素で構成する。

授業では、主にAL向け教材の「Think and Quest」(以下、T&Q)(*)を使用。T&Qには、初めに実験・観察の結果、写真やイラストなどの「考える材料」と「活用する知識」が提示されており、それらを活用してグループで基礎課題や発展課題に取り組む。

山下先生は、生徒に主体的に考えさせることに徹し、授業中の声かけは極力控える。

「グループワーク中には、生徒からたくさん質問を受けますが、資料を読めば分かることや生徒が考えれば気づくことには答えず、ヒントのみを提示しています」

模範解答を示さないことも徹底している。この日の発展課題は難易度が高く、考えに行き詰まるグループが目立った。それでも、グループワークの全体共有では、どのように考えればいいのかという方向性を示すのみで、「後は自分で模範解答を考えて」と、さらなる思考を促した。

「模範解答を与えると、生徒の思考はそこで止まり、模範解答を覚えようとしてしまいます。納得解は自分なりのベストであり、ゴールはありませんから、授業後も思考し続けます」

授業後、発展課題の納得解を書いて提出する「トレーニングシート」に、先生は5段階評価とコメントを書いて返却するが、ここでも模範解答は示さない。生徒同士でシートを確認し、さらに考えを深め合うことを求めるからだ。

定期考査後の答案返却時には、模範解答は渡すが、解説はしない。代わりに、生徒が自分た

* Think and Questは、株式会社ラーズが提供する、生徒の能動的な学びを引き出す授業用教材。



授業で分かったことや疑問を振り返りシートに記入。周りの生徒とグループワークを振り返りながら話し合う姿も多く見られ、生徒の思考は動き続けている様子だった。早速、自分の納得解をまとめる生徒もいた。



模範解答が示されず、自分で考え抜かなくてはいけないのは大変ですが、深く理解できるようになりました。



基礎課題（閉じた質問）は、解答を板書。発展課題は、解答を提示せず、思考の方向性を示すことにとどめ、各自で納得解を考えるように指示した。続いて、本時の学習内容と関連が深いiPS細胞の概要を説明すると、生徒は「そういう研究だったのか」と理解を深めたり、「本当にそんなことができるの?」と驚いたり、学習内容に関心を高めている様子が見られた。

教科書や授業内容をまとめる 「自分の参考書」を作成

主知識の定着を図る学びが、「自分の参考書作り」だ。単元が終わるごとに、生徒は、教科書や資料集を参照し、授業や実験の内容も踏まえて、自分なりの参考書をノートに作成。学期に1回提出し、山下先生のチェックを受ける。参考書の形式や内容は自由で、文系の生徒は基礎を中心にまとめ、生物と関連が深い進路に進む生徒は発展的な内容を含めることが多い。予習として取り組んで分からない点を授業で重点的に学んだり、授業後の復習として作成したりと、進め方も様々だ。

「実際に手を動かし、目で確かめることは、画像を見せるだけの授業に比べてはるかにインパクトがあります」

T&Qを導入してから教材作成にかける手間が減り、その分を授業デザインの計画に充てられるようになったと言う。次時は、本時に学習した遺伝子の「パフ」の観察実験をし、単元のまとめでは、遺伝子診断のメリット・デメリットを考えながら、遺伝子診断の体験実験を行った。

「学習内容を自分でまとめる過程で、内容を

ちで学び合う時間を設ける。さらに、約10人の生徒にどのような学習が効果的だったと思うかをインタビューして、クラス全体で共有する。

思考を深めるために、できるだけ多くの実験を行うことも心がけている。

「実際の手を動かし、目で確かめることは、画像を見せるだけの授業に比べてはるかにインパクトがあります」

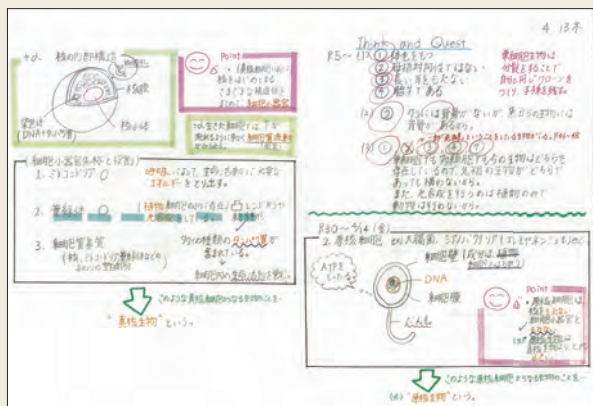
場づくりへの配慮 グループを自由に組ませて 活発な議論を生み出す

より深く理解できるようになりますし、分かりやすく表現する力も身につけてきます」

グループワークでは、生徒が自由にグループを組む。中には、「今日は1人でじっくりと考えたい」と、1人で考える生徒もいる。

「グループのメンバーを構成する力も、社会で求められる力の1つと考えています。また、心が知れた友人と一緒にの方が、分からないことなどを遠慮なく聞き合える利点もあります」

一方、多様な考えに触れることも大切だと考



一人ひとり、内容や形式が異なる「自分の参考書」。生徒からは、「試験前に改めてノートにまとめる必要がないため、問題演習に多く取り組めた」といった声が上がっている。

授業デザインシート

【教科・科目】生物基礎 【分野・単元】遺伝子とそのはたらき

【本時全体の目標】①すべての遺伝子が常に発現しているわけではない

【テーマ・作品】遺伝情報の分配と発現（タンパク質の合成）

ことが分かる。②個体を構成する細胞は遺伝的に同一だが、部位に応じて発現する遺伝子が異なることが分かる。

【設定時数】4時間中の3時間目

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
本時の主題と目標の確認	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容を見通す力 主体的、協働的に学ぼうとする姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 判断力 主体性 多様性 協働性 	<p>【生徒】1時間の授業で学ぶ内容を明確にして、具体的な目標を意識する。</p>	<p>「この授業を通して、学び方や社会人基礎力の習得まで目指してほしい」</p>	<p>生徒に広い視野を持たせて授業に臨ませる。</p>
「考える材料」「活用する知識」の確認と解説	<ul style="list-style-type: none"> 既習の知識を新たな課題に取り組むために活用しようとする姿勢 主体的に教科書等の教材を活用し、自分で知識・技能を身につける力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 判断力 主体性 	<p>【生徒】教師に頼らず、友人とともに主体的、協働的に課題に取り組む。</p> <p>【教師】生徒が理解しにくい部分のみ、最低限の解説を行う。</p>	<p>「ヒトの受精卵と皮膚の細胞は同じ遺伝情報を持っているだろうか。それとも異なるだろうか」</p>	<p>グループ活動（基礎・発展課題）が円滑に進むような柔らかい雰囲気をつくる。</p>
パフと発現遺伝子の関係（基礎課題）	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に教科書等の教材を活用し、自分で知識・技能を身につける力 他者との議論を深め、意見をまとめて、問題解決へ導いていく力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<p>【生徒】既習の知識や、教科書等で調べた知識等を活用して生徒同士で質疑や議論を重ねながら基礎課題に主体的、協働的に取り組む。</p> <p>【教師】机間巡視をして、生徒の言葉を傾聴しながら、必要に応じて生徒の思考が深まるように助言を行う。</p>	<p>「パフの位置が成長段階で変化することには、どんな意味があるのだろうか」</p>	<p>「考える材料」「活用する知識」と教科書の記述等をうまく結びつけて課題に取り組むように促す。</p>
同一のDNAを持つ各細胞の様々な細胞への分化（発展課題）	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に教科書等の教材や基礎課題で考えた事柄を活用し、さらに深い知識・技能を身につける力 他者との議論を深め、意見をまとめて、さらに深い問題解決を進めていく力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<p>【生徒】基礎課題で理解したことを踏まえて、さらに深い課題に対して、自分たちで、納得解にたどり着けるように主体性、多様性、協働性を持って、思考・判断・表現を重ねていく。</p> <p>【教師】本時、もしくは既習の学習内容から、自由で多彩な思考・判断・表現ができるように助言する。</p>	<p>「基礎課題で理解したことを応用できないか考えてみよう」</p> <p>「友人同士で説明し合ってみよう」</p>	<p>思考の展開（考える材料→活用する知識→基礎課題→発展課題）を意識させ、本時のテーマ・目標に沿った正しい概念形成ができるように促す。</p>
納得解の共有とリフレクション	<ul style="list-style-type: none"> 各課題で、グループまたは個人で考えた納得解を共有しようとする姿勢 学習内容を振り返り、自分の理解度を自分で把握（俯瞰）できる力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<p>【生徒】自分の学習内容の理解度を自分で把握できるように、客観的に振り返りを行うことを意識する。</p> <p>【教師】「教師の模範解答」は示さず、各課題の納得解を考えるポイントのみを示す。</p>	<p>「自分たちの納得解の精度をどこまで上げられるか考えよう」</p> <p>「今日の自分の活動を客観的に振り返ってみよう」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 納得解の精度を上げるための取り組みを追求させる。 学習内容をどこまで理解して、どこまで理解していないかを生徒自身に気づかせる。

*山下先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

定期考査前の質問が少なくなり、生徒たちの学び合う姿が見られる

え、実験では毎回グループを変えている。年度最初の授業では、「教室は間違るところだ」という詩を紹介し、どんなことも臆せず発言し、それに対して聞く耳を持ち、互いの意見を認め合って議論を深めるようにと伝えている。

このような授業にしてから、生徒には主体的に学び合う力が育まれている。今では、定期考査前に質問に訪れる生徒は少なくなり、山下先生が放課後に教室を訪れると、生徒たちが互いに確認し合っている姿が見られるという。さらに、「自分の参考書作り」でも知識の定着が確実なものとなり、前述の通り、定期考査の結果は向上した。生徒からは、「『生きる』ということを考えるきっかけにもなった」と大きな視点での声も聞かれるようになった。

ALの実践を通し、山下先生の授業観や生徒観は大きく変わった。

「生徒の力を信じるようになったことが、自身の最も大きな変化です。以前は、先回りして教え過ぎていた部分もあったと思います。今後でも授業を通してアクティブ・ラーナーを育て上げ、ほかの教科や受験勉強、さらには予測不可能な社会を生き抜いていける力に結びつけたいと考えています」

●3年生「地理B」の授業で、単元は「オセアニアの地誌」。地誌全体のまとめの授業として、ペアやグループでのワークを通し、各地域の輸出品から背景にある共通点や相違点を考察した。(P.27に授業デザインを掲載)

前時までのオセアニア地誌を振り返る。先生は「新期造山帯はどこ?」「プランテーションが行われている地域は?」「年降水量500ミリ以上の地域ではどの家畜を多く飼育している?」といった、地形や気候、産業などに関して質問。生徒は、机上の白地図の該当する箇所を指差して、各自で確認しながら、既習の知識を振り返った。

「なぜ?」「どうして?」「と問い続け 因果関係を考えさせることで、 「地理」の本質に迫らせる

箴島先生のアクティブ・ラーニング

因果関係を捉えさせて 地理の面白さに気づかせる

箴島^{おさじま}朋子先生の指導の原点には、自身が高校時代に受けた地理の授業がある。

「初めは、暗記重視の授業だったこともあり、あまり面白さを感じていませんでした。しかし、ある先生が、一つひとつの事項について『なぜそうなるのか』という因果関係を丁寧に説明し



大分県立日田高校
箴島^{ひた}朋子 ^{おさじま}・ともこ

教職歴10年。
同校に赴任して4年目。
2学年担任、地理歴史・公民科主任。
アクティブ・ラーニングの実践は4年目になる。

大分県立日田高校

◎校訓は「剛健、積極、明朗」。文武両道を旨とし、学力だけでなく、社会で活躍できる力の育成に力を注ぐ。2016年度に文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」の2期目の指定を受け、1・2年生全員と3年生SSクラスが課題探究に取り組む。

◎設立 1920(大正9)年

◎形態 全日制/普通科/共学

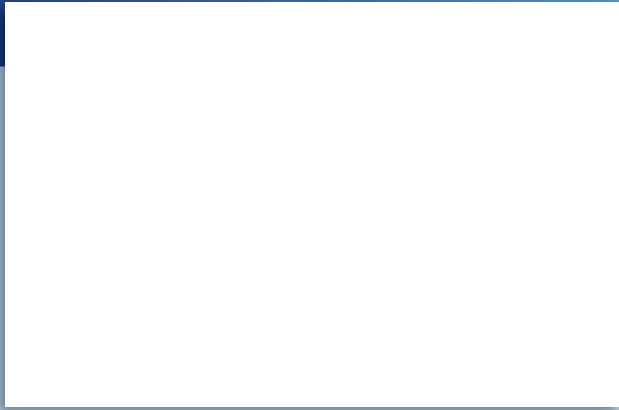
◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

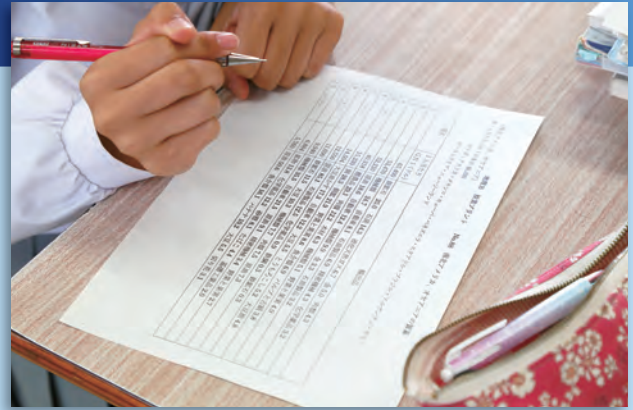
国公立大は、筑波大、東京工業大、神戸大、広島大、熊本大、大分大などに132人が合格。私立大は、青山学院大、早稲田大、同志社大、関西大、関西学院大などに延べ188人が合格。

◎URL

<http://kou.oita-ed.jp/hita/>



隣席の生徒とペアで、ワークを続ける。個人の段階では空欄が目立ったが、「この国は大豆の輸出が多いね」「ということは、家畜がいるのかな」などと考えを出し合い、完成に近づけていった。終了後は各ペアが順に答えを発表。箄島先生は「なぜそう思った?」と根拠を説明させたり、「関連してこの知識も押さえよう」と知識を広げたりする指導をした。



オセアニアと南北アメリカの11か国について、主要輸出品と1人あたりのGNI(国民総所得)から、国名を類推する個人ワークを行った。箄島先生は、「根拠になると思った輸出品目に丸をつけて」と、根拠を基に考えるように促した。また、机間巡視で進み具合を確認し、悩んでいる生徒には「鉄鉱石はどのような地域で多く採れるかな?」など、ヒントを提示した。

てくれて、それまで別個に暗記していた知識が
つながり、地理の面白さを感じました」

そうした体験もあり、箄島先生は、授業で
生徒に因果関係を考えさせることを重視してい
る。ただ、1人で考えるよりも、ほかの生徒と
意見を出し合った方が考えが深まりやすい。そ
こに、アクティブ・ラーニング(以下、AL)
を取り入れた大きな理由がある。

また、抱いていた課題意識として、生徒は家
庭学習では他教科を優先し、地理の学習が手薄
になりがちながあつた。いかに授業を中心
に学びを深めるようにするかを考えたところ、
最終的にALに行き着いたという。

「生徒は主体的になると、教科の面白さに気
づき、思考がどんどん深まり、学んだ内容の定
着も進みます。教師が一方的に教えるのではな
く、生徒が積極的に参加して思考する授業が重
要だと考えました」

こうして箄島先生は、4年前にALの実践を
スタート。校内でALを実践する他教科の授業
を参観するだけでなく、校外の研修に参加した
り、他校の授業を見学したりして、自身の授業
に取り入れていった。

「最初はペアの話し合いを取り入れることから
始めました。ALの『手法』に走り過ぎず、必
要な場面では講義形式の指導も行い、生徒自身
が『知識が定着した』『思考できた』『新しい考
えを学べた』と感じながら学力を高めていける
授業を目指しています」

思考の活性化・深化への配慮

「なぜ?」と考え続けると 知識がつながっていく

箄島先生は、「なぜ?」「どうして?」など、
根拠や理由の説明を求める発問を意識して行っ
ている。

「根拠や理由を深く考える中で、『こんな地形
や気候だから、この資源が存在し、この産業が
発展した』といった因果関係が見えてきます。
元々、地理は、『なぜそうなるのか』『ほかの地
域と比べてどうか』『ほかの知識とどう結びつく
か』など、思考を深める発問を作りやすい教科
だと思っています。その地域の特徴の因果関係をつ
かんで理解することこそ、地理を学ぶ本質だと
捉えています」

この日の授業でも、主要輸出品から国名を類
推する課題で、ある生徒が「砂糖」に着目した。
箄島先生が「砂糖は何からできる?」と質問す
ると、生徒は「サトウキビ」と答えた。さらに「そ
れはどんな気候で育つ?」と問うと、「温かい地
域。ということ、キューバかな」と思考を深
めていった。

ペアやグループワークでは、生徒同士が話し
合って思考を深めていく。世界の各地域の輸出
品の特徴をまとめる場面では、「ヨーロッパの
国々は機械類の輸出が多い」「石油などの資源が
採れる国や地域もあるね」というように、様々
な視点から意見が出された。



各グループの発表後、箴島先生は「輸出品からどんなことが分かる?」と質問。「機械類は先進国が多いなど発展の状況が分かる」「農作物や資源から気候や地形が分かる」「プランテーションを行う国は植民地支配の歴史がある」といった生徒の発言を受け、先生は「輸出品にはその国の地形や気候、歴史的背景が表れていることが分かるね」と授業を締めくくった。



地誌の単元のまとめとして、アジアや南北アメリカ、オセアニアなど各地域の輸出品の背景には、それぞれどのような共通点と相違点があるかを3人グループで話し合った。



ほかの人の意見を聞くと、新しい視点を持ったり、忘れていたことを思い出したりして、自分1人で考えることの限界を痛感します。

場づくりへの配慮

ペアやグループの学習は
時間と生徒の管理を徹底

「初めに教科書を基に知識を教えるから、『これはどうしてだと思っ?』などと全体に問いを投げかけ、生徒の発言をつないでいきます。また、生徒の思考が活性化するように、頻繁にペアワークを取り入れています」

学習内容によっては、講義形式が主体の授業もある。その場合にも、できるだけ生徒に考えさせることに努める。

「この日の授業では、輸出品を通して、地形や気候、資源、歴史的背景などが見えてくること、つまり、これまでに学んできたことは相互に関連していることに気づかせるのが、最大のねらいでした。授業の最後には、多くの生徒が理解した様子でした」

そうした学びを繰り返すうちに、生徒は自分が理解するだけでなく、根拠や理由とともに説明する重要性にも気づく。その段階に達すると、ペアやグループでの話し合いはますます活性化し、「今の説明は分かりやすかった?」などと尋ねる姿も見られるようになるという。

箴島先生がAIを始めた当初は、生徒が要点を押さえて話し合えなかったり、学力が高い生徒が一方的に教えたりといった姿が見られた。「そうした話し合いでは、生徒は学習の効果

を感じられず、ペアやグループの活動が嫌になっってしまう。そこで、時間と生徒の管理の徹底を心がけています」

時間の管理としては、「5分間で話し合っ」などと明確に示し、要点をつかんで、効率的に話し合う意識を持たせる。生徒の管理では、最初に個人ワークを行って、自分の考えを持たせたり、ペアワークの際、「まず右側の生徒から説明して」と指定したりしている。

また、雰囲気づくりの一環として、押さえてほしい事項の語呂合わせを考案し、授業の随所で生徒と一緒にリズムに合わせて発声している。

「考える場面が続いて飽きている様子が見られた時などに、息抜きを兼ねて声を出させています。気持ちが前向きになり、発言しやすいム



白地図を多用することも箴島先生の指導の特徴だ。書き込ませるときれいにまとめることが目的となる生徒がいるため、毎授業の振り返りは指差しをしている。生徒が自分の理解度を把握し、自ら学び直すきっかけとなる。

授業デザインシート

【教科・科目】地理B

【分野・単元】オセアニアの地誌

【テーマ・作品】オーストラリアの貿易、世界の貿易

【設定時数】3時間中の2時間目

【本時全体の目標】新大陸の輸出品目から各国の特徴を理解し、地誌の分野のまとめとして、各地域の輸出品から共通点、相違点を考察する。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
前時までの振り返り	<ul style="list-style-type: none"> オーストラリアの自然環境や産業の知識を正確にアウトプットする。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 	<p>【静の活動】</p> <p>現在の知識を白地図に引き出し、生徒自身の理解度を把握する。一問一答形式の質問を投げかけ、既習の知識を確認する。</p>	<p>「オーストラリアの地帯構造は？」</p> <p>「オーストラリアの各気候区の場所は？」</p> <p>「○○(資源)が採れる場所は？」</p> <p>「マリー川はどこを通っている？」</p> <p>「プランテーションが行われている地域は？」</p> <p>「年降水量○○以上の地域ではどの家畜を多く飼育している？」</p> <p>「酪農するための条件は？」</p>	個人で白地図を指せているか。
地誌全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 南北アメリカ、オセアニアの輸出品から国を考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 判断力 表現力 	<p>【静→動の活動】1人あたりのGNI、輸出品から国名をあてはめる個人ワークをした後、そう考えた理由までをペアで議論する。その後、各ペアが順に発表して答え合わせをして、全体で共有する。</p>	<p>「1人あたりのGNI、輸出品から国名をあてはめてみよう」</p> <p>「根拠になると思ったところに丸をつけて考えよう」</p> <p>「(生徒の答えに対して)なぜ、そう考えた？」</p>	「なぜその答えを選んだのか」を議論できているか。
地誌全体のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> 今まで学習した各地域の輸出品を振り返り、各地域の共通点・相違点を考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 協働性 表現力 	<p>【動の活動】3人1グループで、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアの輸出品の共通点、相違点を考える。その後、各グループが発表して共有し、地誌全体のまとめにつなげる。</p>	<p>「各地域の輸出品でどんな共通点があった？」</p> <p>「例外は？」</p> <p>「輸出品からどんなことが分かる？」</p> <p>「輸出品を見ると、今まで勉強したことが全部隠れているね」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 輸出品を見ることで、地域的な規則性や傾向性、その国の自然環境、経済状態が分かることに気づかせる。 「アジアはひとつくりできない」ことに気づかせる。

*葦島先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

ドになることも大きな利点です」

成果と課題

「覚える教科」から「考える教科」に意識が変化

2年生の最初は、地理は「覚える教科」と考えている生徒が大半というが、前述のような授業を繰り返して経験すると、「考える教科」という意識が変わっていくという。

「生徒は自分で考えるようになり、次第に私も想定していなかった深い考えが示されることが増えていきます。ある生徒は、地理の授業で学んだ『なぜそうなるのか』という思考が、他教科にも生きたと話してくれました」

また、「歴史より楽しそうだ」といった消極的な理由で地理を選択した生徒が、授業を重ねるうちに「地理の面白さが分かった」「大学で地理を専攻したい」と言うようになるほど、学習の姿勢が変わっていった。

今後は、さらに思考力を高めていくために、多様性や新しい価値観を身につけることを意識した学びを取り入れたいと考えている。

「答えのないテーマについてディスカッションする学習などを検討しています。そうした学びを通し、地理の面白さを実感するとともに、大学入試の結果にも結びつき、3年生の最後に『地理を学んでよかった』と思ってもらえる授業を実現したいと考えています」

青森県立五所川原農林高校

グローバル人材の育成

「GLOBAL G.A.P.^{ギャップ}」への
挑戦を通して、地域の農業の
発展を支える人材を育成

変革のステップ

背景と課題

- 農業市場が世界規模で拡大する中、時代の変化に適応し、持続可能な農業に貢献する人材を育成したいと考えた

実践内容

- 「GLOBAL G.A.P.^{ギャップ}」への挑戦 全学科から希望者を募ってチームを編成し、農業生産の国際的な第三者認証「GLOBAL G.A.P.」の取得を目指す。また、1年次の必修科目「農業と環境」で全生徒の認証審査への意識づけを強化
- 学校設定科目「五農^{ごのう}チャレンジ」の設置 全学年で学び直しの時間を正課に位置づけ、ベネッセの「マナトレ」を用いた問題演習に取り組む
- 「課題研究」 専門性の向上に向け、2・3年次に、地域の農業にかかわるテーマで探究学習を行う

成果と展望

- 前向きに学習する生徒が増え、農業への規範意識が向上。地域農業への貢献につながっている
- 農業関連の進路希望者が増加
- 国際化する農業への対応の強化を目指す

PROFILE



旧制・北津軽郡立農学校として設立。校訓「正剛明朗」の下、社会で代替不可能な「人財」の育成を目指す。全国農業高等学校長協会のアグリマイスター顕彰制度では、マイスターの認定数が2年連続日本一を記録している。

設立	1902 (明治35) 年
形態	全日制/生物生産科・森林科学科・環境土木科・食品科学科・生活科学科/共学
生徒数	1学年約135人
2017年度進路実績 (現役のみ)	公立大は、青森公立大に1人が合格。私立大は、専修大、東京農業大、日本大、近畿大などに延べ16人が合格。短大、専門学校進学62人。就職90人。
住所	〒037-0093 青森県五所川原市大字一野坪字朝日田12-37
電話	0173-37-2121
Web site	http://www.goshogawara-ah.asn.ed.jp

徹底した品質管理の実現に向け、潜在リスクへの意識づけを強化

青森県中西部に位置する同県立五所川原農林高校は、100年以上の歴史を持つ学校だ。全国的に農家の高齢化が進む中、地域の農業を活性化させる人材の育成に力を注いでいる。その柱として、農業生産の国際的な第三者認証「GLOBAL G.A.P.^{ギャップ}」(※1) (以下、同認証)の取得に向けた取り組みを推進している。同認証は、オリンピックの選手村で提供される食材の調達基準の1つに採用されるなど、世界的に普及しているが、審査の厳しさもあってか、日本の農家での取得率は伸び悩んでいる。そうした中、同校では、2015年度から、全学科か

*1 ヨーロッパの民間企業が、農場の土壌や水質の保全、使用機材や肥料の管理方法といった200以上の項目について、農産物の栽培から収穫・出荷までの全工程を毎年審査し、それらの安全性を保證する規格。「G.A.P.」は、「Good Agricultural Practice」の略。

ら希望する生徒を募って「GLOBAL G.A.P. チーム」（以下、グローバルギャップチーム）を編成し、同認証への挑戦を開始。同年度に、校内で栽培するリンゴの審査を申請し、日本の高校としては初めて同認証を取得した。

この取り組みを始めた背景には、農業の国際化の進展がある。インターネットの普及に伴い、消費者は世界中の農産物を手軽に入手できるようになった。そのため、日本の農家が手がける作物のおいしさや安全性を、各国に対して客観的に証明できるようにすれば、販路を海外に拡大し、産業としての農業の魅力を高める原動力となるだろう。そこで、生徒が国際社会で



加藤 佑也 かとう ゆうや
青森県立五所川原農林高校
教職歴17年。同校に赴任して4年目。食品科学科主任。「自ら考える力を養えるよう生徒を導く」



越谷 晋樹 こしや しんじ
青森県立五所川原農林高校
教職歴18年。同校に赴任して8年目。生物生産科主任。「農業を通して社会に通用する人間を育てる」



三上 浩樹 みかみ ひろき
青森県立五所川原農林高校
教職歴19年。同校に赴任して7年目。環境健康フェイルド長。「ともに学び、成長する。新しいこと、難しいことにも生徒と挑戦する」



山口 章 やまぐち あきひろ
青森県立五所川原農林高校校長
教職歴37年。同校に赴任して3年目。「生徒の将来に責任を持つ教育」。激動する社会を生き抜く力を生徒が育めるようコーチする」

必要とされる農業の規範に目を向けるきっかけとして、同認証へ挑戦することにしたのだ。また、それを通して、チームワークやコミュニケーション力をしっかり身につけてほしいという思いもあった。山口章校長は、次のように語る。

「高い目標の達成に向け、仲間と協働する中で、生徒は学びを深め、自分の可能性にも気づくでしょう。認証の取得を目指す過程にこそ、大きな意味があると考えています」

16年度からは、農業の基礎を学ぶ1年次の必修科目「農業と環境」において、全生徒に向けて同認証への意識づけを強化している。その一環として、同認証を「農場の健康診断」と呼んで意義をイメージしやすくし、自分たちの健康診断と同じように、普段の実践が審査結果に結びつくことと説明している。また、徹底した安全性と品質の保証が同認証の根本理念であるため、実習では、潜在しているリスクを未然に防ぎ、農産物のさらなる安全性と品質の向上を目指して、課題の発見・解決力の育成を重視。生徒同士が話し合い、試行錯誤しながら作業を進める。教師は生徒の間違いに気づいても直接的には指摘せず、「なぜそう考えるのか」を問いかけていく。さらに、他教科・科目での学習内容を振り返り、化学肥料に頼らずに土壌の環境を改善する方法などを考えさせる場も設けている。生物生産科主任の越谷晋樹先生は、こう話す。

「現状をよりよくするための工夫は、農業だけでなく、どの職種・分野でも必要とされ

ます。同認証をきっかけに、改善策を積極的に提案する姿勢を育み、生徒の生きる力を伸ばしていきたいという思いがあります」

認証の取得を目指し、主体的に行動する生徒たち

同認証の審査の観点や内容などは毎年更新されるため、過去に認証を取得した作物についても、再申請にあたっては改めて対策を立てる必要がある。同校は、16年度にはリンゴと米で同認証を取得した。17年度には、先出の作物に加えてメロンでの取得も目指し、グローバルギャップチームのメンバー28人は、今年5月から放課後を中心に準備を本格化させた。3年生が下級生を指導しながら、9月中旬の審査に向けてスケジュールを作成。17年度の審査項目リストに基づいて課題を洗い出すとともに、施設の改善や農場の整備などを進めていった（認証審査の結果は、12月に発表される予定）。

8月末には、本番に向けた最終調整として、弘前大学G.A.P.相談所の山野豊所長が審査員役となり、チームの代表者である3年生数人と質疑応答を繰り返しながら、作成中の申請書類とメロン畑をそれぞれ点検する公開模擬審査を行った。書類による点検では、リンゴ・米・メロンの栽培に関するリスク評価・管理が、主要なチェックポイントの1つとなる。生徒の受け答えからは、農薬の処理や病害虫の駆除、生物多様性を確保するための環境保全といった

様々な課題について、物理や化学、生物などの教科・科目の知識を活用して分析し、解決策を講じている様子がかがえた。メロン畑の点検では、収穫・運搬上のリスク管理や灌水装置^{かんすい}などの改善点をしっかり説明する生徒の姿が見られた（写真1）。食品科学科主任の加藤佑也先生は、生徒の成長を実感すると話す。

「入学当初は引つ込み思案だった生徒も、チーム内での話し合いを通して、自分の考えを順序立てて、的確に言葉にできるようになりました。また、視野が広がるため、1つの課題をいくつもの角度から捉えられるようになり、思考力や判断力なども総合的に身につけていると感じます」

同認証の取得後、グローバルギャップチームには、自分たちの実践を校外で紹介する機会が増えている。全国の高校や施設などから講演を

写真1 認証審査本番では、農薬の取り扱いや管理状況などもチェックポイントの1つとなる。そこで、模擬審査では、メロン畑の薬品庫に山野所長が立ち入り、扉の施錠の有無などについて、グローバルギャップチームの生徒と質疑応答を行った。

写真2 同校は2016年度から青森県教育委員会の「高校生農力開花プロジェクト」の指定を受けており、中国・四川省でのリンゴの販売は同プロジェクトの一環として行われた。生徒6人と教師4人が参加し、10時間で約650個を売り上げた。

依頼されるほか、衆議院議員会館で国務大臣を含む国會議員にプレゼンテーションを行ったこともある。また、16年度のメンバーの代表者は、9月にオランダのアムステルダムで開催された「GLOBAL G. A. P. サミット」に参加し、世界各国から集まった農業関係者を前に英語でスピーチを披露した。さらに、17年1月には、中国の四川省を訪れ、自分たちが栽培したり、リンゴを現地の一流百貨店で販売した（写真2）。その準備として、県内の私立大学の中国人教授を招き、中国語の講習会を3回行った。短期間だったにもかかわらず、どの生徒も販売に用いる中国語をマスターし、現地の販売会場では中国人に間違えられたほどだったという。

「自分にとって切実な課題だと感じると、生徒は大変な意欲と集中力を見せます。日本の農家の代表として参加するという責任感も

加わり、さらに『頑張ろう』という気持ちが高まったのだと思います」（山口校長）

地域の農業課題の探究を通して、生徒の専門性を高める

同認証への挑戦には、2つの取り組みの支えが大きい。1つは、国語・数学・英語の学び直しを行う、全学年対象の学校設定科目「五農チャレンジ」だ。ベネッセの「マナトレ」（*2）を用いて問題演習を進めている。環境健康フィールド長の三上浩樹先生は、こう語る。

「生徒が前向きな気持ちで学び直しに取り組めるようになるためには、目的をしっかりと示す必要があります。そこで、担任は専門的な知識・理解の向上と基礎学力との関連性や、就職試験における学力試験の比重の増加などを繰り返し説明しています」

もう1つは、2・3年次の「課題研究」だ。各学科に4つずつ設けられた計20の研究室の中から、生徒が自分の興味のある研究室を選び、地域の農業と関連が深いテーマをグループで探究する。2年次の3学期には、1年生の前で2部構成の研究発表会を行う。第1部はプレゼンテーションで、グループごとに代表者数人が登壇し、スライドなどを用いて研究内容のポイントを紹介する。第2部はポスターセッションで、見学に来た1年生に研究内容を詳しく説明し、質問に答える。以前はプレゼンテーションのみだったが、2年生が1年生と直接交流できるよ

*2 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

うにポスターセッションを加えた。

「質疑応答では、尋ねられた内容や相手の理解度などに応じて、答え方を工夫する必要があるので、コミュニケーション能力の向上につながるでしょう。思いがけない質問を受け、とっさに答えられなければ、研究内容を振り返り、理解を一層深めるきっかけになります。また、質問する場を設けることで、1年生は本当に自分の所属したい研究室を見つけやすくなります」(三上先生)

課題研究の内容は、グローバルギャップチームが発足してから一層充実し、意欲的な研究が増えてきている。また、農業高校におけるプロジェクト学習の成果などを競う「日本学校農業クラブ連盟大会」の17年度の青森県大会では、同校の研究が発表部門7種目中6種目で東北大会に進出し、2種目で全国大会に出場した。

「チームのメンバーが研究室で活躍する姿を見て、ほかの生徒も刺激を受け、同認証への意識を高めています。また、より充実した研究を目指し、各研究室が切磋琢磨する雰囲気も生まれています」(山口校長)

ほかの第三者認証も視野に入れ、取り組みの継続的な発展を目指す

一連の取り組みにより、学習に意欲的に取り組む生徒が増え、農業関連の各種資格試験などで高い目標を自ら設定し、積極的に挑戦している。同認証取得前は65%が農業関連以外の進路

希望だったが、取得後は逆転した。また、安全・安心な農産物の育成には日頃の実践が非常に重要だという意識が高まり、どの生徒も農場での作業の前に手洗いを励行するなどしている。同認証が求める品質管理の規範が、学校全体に根づいていることの表れと言えるだろう。さらに、「課題研究」では、研究室ごとにプレゼンテーションやポスターセッションの練習が盛んに行われるようになったことで、就職試験や大学の推薦入試の面接などでは、しっかりとした受け答えができていくという。

グローバルギャップチームのメンバーの声からは、農業への関心や意欲を高めるとともに、将来の展望を具体化させていることがうかがえる(コラム)。実家の農業を手伝う際に、リスク評価・管理などについて改善案を出す生徒が多く、「子どもが見違えるように成長した」といった声が保護者からも寄せられている。

今後は、取り組みを継続的に発展させていく体制の整備を最重要課題と位置づけ、さらに多くの作物で同認証の取得を目指す。また、ほかの国際水準の第三者認証への挑戦にも積極的に、森林科学科の生徒が、森林の保全や木材の流通・加工のプロセスなどに関する森林認証「FSC」(*3)の審査に挑戦し、来年2月には認証が下りる見込みだ。

山口校長は、今後の抱負を次のように語る。「近い将来、地産地消は別としても、農産物は第三者認証を取得しなければ市場への流通が難しくなるでしょう。地域の農業と密接に結びついている本校には、国際社会の動向を予測し、先手を打てる人材の育成を通じて、地域の発展に貢献するという使命があります。それを果たすために、これからも先生方としっかり力を合わせ、指導改善を推進していきたいと考えています」

17年度グローバルギャップチームメンバーによる成長実感のコメント

コラム

生物生産科3年 伊藤宗史さん

◎チームでの取り組みを通して、よい農産物を育てるためには、上質な土壌が欠かせないと実感した私は、化学などの参考書を読むなどして、圃場の地力向上を追求するようになりました。学べば学ぶほど、農業の奥深さが分かり、大学で農業にかかわる学問を専攻するという目的が固まりました。また、メンバーと話し合う中で、自分の考えを分かりやすく伝えられるようになったと感じています。

生物生産科3年 高橋なぎささん

◎1年生の頃は、知らないことばかりでしたが、自分で調べたり、先輩に質問したりするうちに、任せてもらえる作業が少しずつ増えていき、自信になりました。将来は、農業高校の教師になり、知識も経験もなかった頃の気持ちを忘れずに、生徒とともに「GLOBAL G.A.P.」の認証取得に取り組んでいきたいと考えています。

食品科学科3年 豊川泰世さん

◎チームに所属した当初は、調べたり、考えたりすることが多く大変でしたが、それだけに、認証が取得できた時の達成感忘れられません。「頑張れば結果はついてくる」と実感し、ほかの教科・科目の学習にも前向きに取り組めるようになりました。また、実家は米農家なのですが、チームで学んだことを家業に生かし、米のさらなる品質向上につなげたいと考えています。

* 3 「Forest Stewardship Council」の略。

茨城県・私立江戸川学園取手中・高校
理数教育

理数融合型の協働学習
「メディカルサイエンス」で、
生徒の深い学びを実現

変革のステップ

背景と課題

- 高い進学実績を実現している半面、探究的な学びの場を思うように設けられていなかった

実践内容

- 学校設定科目「メディカルサイエンス」の設置**
医科コースに、理数融合的な学びに特化した学校設定科目「メディカルサイエンス」を設置し、物理・化学・生物の実験や医療倫理に関する生徒同士の話し合いを行う
- ルーブリックの作成** 生徒の探究的な活動を客観的に評価するためのルーブリックを作成し、「メディカルサイエンス」で活用

成果と展望

- 外部のコンテストに積極的に挑戦し、受賞する生徒が増加
- 医師にこだわらず、柔軟で幅広い進路選択を行う生徒が現れた
- 若手教師の指導改善への意欲が向上
- 「メディカルサイエンス」の成果を学校全体で共有し、普通科コースでも取り組みを充実させていく予定

探究的な学びの場を設け、
主体的な学習集団の形成を図る

茨城県・私立江戸川学園取手中・高校は、1学年の生徒数が400人を超える大規模校だ。高校では、普通科コースに加えて、国公立大学医学部を目指す医科コースを設置し、高い志と倫理観を持った医師志望者の育成を図っており、旧帝大を始めとする最難関国立大学や医学部への合格者を毎年送り出している。一方で、探究的なスキルを十分に身につけさせられていないという課題があった。

そこで、生徒を主役とする取り組みを充実させようと、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けることも視

PROFILE



「誠実・謙虚・努力」を校訓、「心豊かなリーダーの育成」を教育理念とし、国際社会で活躍できる人材の育成を目指す。2014年度に小学校を開校し、茨城県初の12年一貫教育校となった。短期留学や異文化交流など国際理解教育にも力を入れている。

設立	1978 (昭和53) 年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約 420 人

2017年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京医科歯科大、東京工業大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大などに121人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ943人が合格。

住所	〒302-0025 茨城県取手市西1-37-1
電話	0297-74-8771
Web site	http://www.e-t.ed.jp

野に入れ、指導改善を推進している。教務部長の平野雄広先生は、その意図を次のように語る。

「学問の本質に関心が高まると、生徒は『何のために学ぶのか』が見えてくるので、学習意欲が高まり、学力も向上していくと思います。そうなれば、最難関の志望の実現につながるだけでなく、大学入学後の学びにも生きてくるでしょう。そこで、生徒同士が知的好奇心を刺激し合い、主体的に学びを深めていく環境を整備したいと考えました」

正解のないテーマを探究し、医療の課題と正面から向き合う

まずは生徒数の少ない医科コースから指導改善に着手することにし、2017年度には、医科コースに週1コマの学校設定科目「メディカルサイエンス」を設置した(図1)。次期学習



茨城県・私立江戸川学園取手中・高校
平野雄広 ひらの・ゆうこう
 教職歴21年。同校に赴任して22年目。教務部長。「生徒に敬意を払い、紳士・淑女として扱い、高潔な精神を宿す人間を育てる」

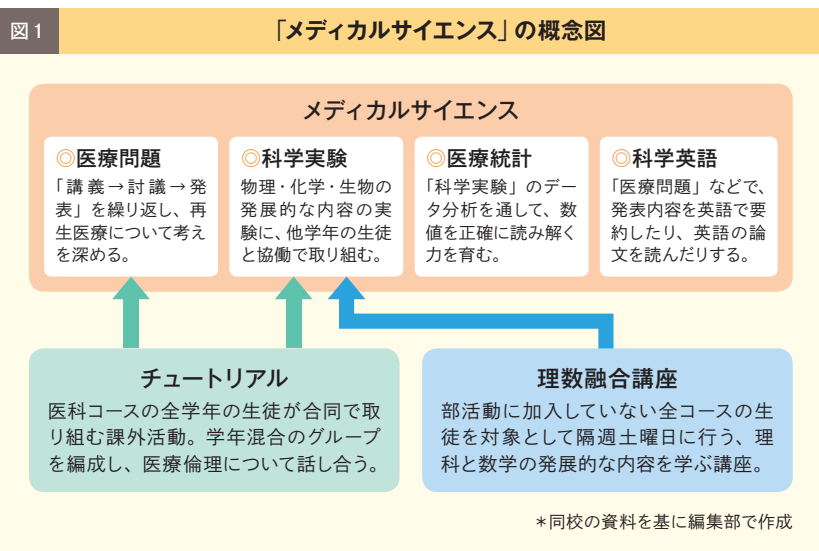
茨城県・私立江戸川学園取手中・高校
兼龍盛 かね・りゅうせい
 教職歴21年。同校に赴任して11年目。医科コース長。「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く、真面目に教える」

茨城県・私立江戸川学園取手中・高校
熊代淳 くましろ・あつし
 教職歴12年。同校に赴任して5年目。進路指導部副部長。「生徒に寄り添い、生徒とともに成長し続け、夢を共有して実現させる」

指導要領で新設される選択科目「理数探究」を先取りして、理数融合的な学びに特化した学校設定教科「理数科」を設置し、その1科目と位置づけた。初年度は「科学実験」と「医療問題」という2つの講座に力を入れている。

「科学実験」は、学年縦割りの協働学習だ。発展的なテーマの下、1年生と3年生が生物、1年生と2年生が物理、2年生と3年生が化学の実験に、合同で取り組む。例えば、物理では、振り子の周期を測定し、重力加速度を求める実験、化学では、正体不明の白い粉を与え、その成分を試薬を用いて突き止める実験などを行う。生徒自身の創意工夫や試行錯誤を促したいと、教師は原則としてファシリテーターに徹し、上級生が下級生に実験の手順や機器の扱いなどを教えながら進める。実験によっては、結果を分析・考察する際に、標準偏差や標準誤差といった統計学の基礎を学び、誤差が生じる原因を深めて精度を上げる方法を話し合う。

「医療問題」は、茨城大学教育学部の石原研治教授の協力の下、再生医療について考える講座だ。まず、石原教授から最先端の研究成果や医療倫理にかかわる講義を受ける。次に、教授が示す「iPS細胞を使って、豚の体内で人間移植用の肝臓をつくるのは是か非か」といった正解のないテーマについて、グループに分かれて話し合う。そして、その内容をクラスで発表して代表グループを選抜し、代表グループが学年全体を前に発表する場を設けている。こうし



た「講義→グループ討議→発表」という流れを、1年間に9セット繰り返す。

企画段階では、iPS細胞の培養といった先進的な実験を行うというアイデアも提案されたが、そうした知識・技術の習得よりも、生徒同士がコミュニケーションを重ねながら、倫理観を高めていくことを重視した。医科コース長の兼龍盛先生は次のように述べる。

「細胞を培養して蛍光顕微鏡で光らせるといった実験を行えば、生徒は盛り上がるかも

しれません。しかし、根本的な原理を理解しないまま手を動かしていても、単なるイベントで終わってしまうでしょう。医療の専門家になるための基礎として、多様な意見があることを認識した上で、自分なりの考えを持ち、それをしっかりと相手に伝えられる力を育成したいという思いがありました」

そうした方針の背景には、開校以来の心を重視する教育があると、進路指導部副部長の熊代淳先生は語る。

「目の前の成果を求めるよりも、自分の核となるものを高校時代に育てることで、5年後、10年後に大きく花開くと信じています。そこで、進学校であつても受験勉強一辺倒にならず、『心豊かなリーダーの育成』という教育理念を大切にしています」

上級生の姿から刺激を受け、 学びを深めていく下級生

「メデイカルサイエンス」のプログラムは、以前から行っている2つの取り組みを基にして策定された。1つは、教師有志が15年度から始めた「理数融合講座」だ。部活動に加入していない全コースの生徒を対象に、理科と数学の各90分間の講座を隔週土曜日の午後後に設け、両教科の見方・考え方を組み合わせた、複合的な内容に取り組んでいる。例えば、1コマ目の化学で分子の構造を学ぶと、2コマ目の数学では正多面体の原理について模型を作りながら考え

る。講座を続ける中で内容が充実していくとともに、指導のノウハウも積み上がったため、これを「メデイカルサイエンス」の「科学実験」に応用することにした。

もう1つは、医科コースが夏季休業期間に2日間設けている課外活動「チュートリアル」だ。再生医療にかかわる映画を見たり、現役の医師による講演を聴いたりした後、学年混合のグループに分かれ、自由にテーマを設定して話し合う（写真1）。これは、「科学実験」「医療問題」両方に結びついている。

3年生は1・2年生から意見を引き出す役割を担い、話し合いの進捗やテーマの設定状況などを2時間ごとに教師に報告。教師はそれを受け、話し合いの方向性が定まるようアドバイスする。また、生徒が話し合いや発表について相談したり、講評を受けたりできるよう、医学部

写真1 「チュートリアル」では、医科コースの全学年の生徒が、十数人ずつ6～7グループに分かれて話し合う。その進め方は様々だが、班長を務める3年生は黒板に主要な論点やメンバーから出された意見などを書き出し、話し合いの深化を図ることが多い。

に進学した卒業生数人をチューターとして招いている。医師への道を歩み始めた卒業生の姿を見て、生徒に将来の自分をイメージしてほしいという思いがある。

16年度には、兄弟に臓器を移植できるよう、遺伝子操作をされて生まれてくる子ども、いわゆる「救世主ベビー」の人生を描いた映画を上映。「技術的には可能であつても、倫理上許されないことがあるのではないか」「人命の救済とは何か」といったテーマに各グループが挑んだ。1年生は、グループの代表として、話し合った内容を発表し、ほかのグループとの質疑応答を行った。1年生がしっかりと受け答えができるよう、どのグループでも上級生のアドバイスには熱が入っていたという。

「1年生は、上級生の熱心さに触れ、『来年は自分も下級生に教えられるようになりたい』と感じるようです。こうした次学年への伝承を『メデイカルサイエンス』にも生かしたいと、『科学実験』を学年縦割りで行うことにしました」（兼先生）

学校独自のルーブリックで 公平かつ客観的な評価を実現

「メデイカルサイエンス」の取り組みへの評価には、独自のルーブリックを用いている。数学と理科のそれぞれについて、発表用とレポート用の2種類を作成している。発表用は「発表の説得力」「表現の工夫」などの5項目（図2）、

図2

「メディカルサイエンス」のルーブリック（発表用）

評価項目 (評価項目の詳細)	A (目標を大いに達成している)	B (目標を達成している)	(目)
項目1 発表の構成 (時間内に話の流れがうまく組み立てられているか)	・時間を守りうまく組み立てられている。 ・各項目への時間配分が適切である。	・時間は守れているが、最後に急いで終わらせてしまったり、早く終わらせてしまったりしている。	・制限時間が過ぎてしまっている。
項目2 発表の説得力 (示したい事柄や結論がうまく伝えられているか)	・論旨が良く伝えられている。 ・わかりやすい話し方になっている。	・論旨があまりよく伝えられておらず、わかりにくい。 ・専門的な用語を用いているが、その説明があまりない。	・示したい、不明確
項目3 表現の工夫 (発表・スライドにおいて、言葉の表)	・スライドに図や表、写真が効果的に使われている。	・スライドが文章のみであり、図や表、写真が少ない・全くない。	・スライドをのせていない

「医療問題」の話し合いでクラス代表グループを決める際に用いる、生徒が相互評価を行う評価シートも、このルーブリックを基に作成されている。

* 同校の資料を一部抜粋して掲載

レポート用は「実験（授業）への積極的参加」などの3項目で、それぞれA・B・Cの3段階で評価し、100点満点に換算する。このルーブリックは、兼先生の主導の下、「ルーブリックとは何か」を調べるところから始め、専門書や関係する学会の資料などを参照しながら医科コースの教師間で合議を重ね、形にしていっていった。

その際、表現や基準を少し変えれば普通科コースでも使えるものになるよう意識したという。

「ルーブリックの作成は、我々にとつては教材研究の側面もありますが、生徒にとつては評価に直結します。どの先生でも普遍的・客観的に評価できるものにしたみたいと、ゼロから検討を進めました。今後は、普通科コースでも『総合的な学習の時間』（以下、『総合学習』）などの評価に活用していく予定です」（兼先生）

指導改善を積み重ね、その成果を学校全体で共有していきたい

同校の指導改善は、着実に実を結びつつある。最も大きな変化は、医科コースから外部のコンテストに出場する生徒の増加だ。多くの生徒が決勝に進出したり、受賞したりするなど、目覚ましい成果を上げている。また、17年度の「化学グランプリ2017（*1）」の校内予選では、前年度に同グランプリに参加した3年生が下級生のために、自主的に予選の試験問題を作成し、採点まで行った。全学年合同での取り組みを通して、上級生が下級生のよい手本となるべきだという意識が浸透していることがうかがえる。

生徒の進路意識も変わりつつある。16年度卒業生の中には、医師免許を取得して厚生労働省に入り、医療行政の変革に取り組みたいという生徒も現れた。医療の根源的な課題にアプローチした結果だと捉えている。

「医学部卒業後の進路というところ、生徒は医師をイメージしがちですが、実際は研究や医療行政など、活躍の場は多岐にわたります。キャリア教育の視点から生徒の視野を広げることで、将来の可能性も多様になると改めて感じました」（兼先生）

生徒の変化に伴い、教師にも積極性が出てきた。特に若手教師が「理数融合講座」に率先して参加し、発展的な内容の指導に取り組みようになった。

「学校を一気に変えるのは簡単ではないため、小さな取り組みの積み重ねが大切です。少しずつ成果を上げながら、次第に改善の範囲を広げ、学校全体に波及させていくというアプローチが、本校のような大規模校には合っていると思います」（熊代先生）

今後の課題は、「総合学習」の改善だ。現在、2年次以降に普通科コースから分かれる東大コースでは、「総合学習」に模擬裁判を行ったり、「模擬国連」（*2）の活動に参加したりと、生徒の活躍の場を広げている。そうした生徒が主役になって活躍できる取り組みを、全校体制で推進していきたいと、平野先生は強調する。

「生徒に主体性を求める以上、我々教師も新しい企画をどんどん出し、挑戦していかなければなりません。生徒や学校をどのように変えていきたいのかという明確なビジョンを設け、先生方と力を合わせながら、指導改善を続けていきたいと考えています」

*1 高校生以下の子どもが化学の実力を競う全国大会で、1次選考ではマークシート方式による試験、2次選考では実験を伴う記述試験が行われる。
*2 各国から学生・生徒が集まって国際問題について話し合い、最終的にある意見を採択するイベント。

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、2年生に受験に向けた「3年生0学期」を意識させるための「受験シミュレーションシート」について検討する。

センター試験を利用した受験シミュレーション

2年()組()番氏名()

①まず、自分の得点を記入します。(理社は必要な科目の3年生本校平均点を記入)

5教科	国語	英語 筆記	英語 リス	英語 計	数学 IA	数学 IIB				化学 基礎	生物 基礎
①	理系 文系										

理系は理科2科目と地歴・公民1科目、文系は地歴・公民で2科目と理科基礎2科目を使用します。

②次に志望校を前期・後期の2セット、傾斜配点も考えて換算点を記入します。(左端に文理の記入)

使用する理社の科目名を記入して、志望校を前期後期のセットで2つ書き込みます。

換算点をそれぞれに記入します。(小数第1位まで;第2位四捨五入)

文理	国語	英語 筆記	英語 リス	英語 計	数学 IA	数学 IIB				判定	志望校 学部学科(日程)

③「センター試験集計結果」の冊子で分布に当てはめてみましょう。(P156～;データネット)

⇒判定を記入

判定だけを見るのではなく、度数分布のどの位置にあるのか、また昨年度の分布で合格の割合はどうなっているのか等をよく見ましょう。

④目標点

5教科	国語	英語 筆記	英語 リス	英語 計	数学 IA	数学 IIB				化学 基礎	生物 基礎
④	理 文										

⑤目標点を取るための具体的な決意

Before

福岡県立東筑高校
辻本貢士先生提供

「2年生 3学期
受験シミュレーションシート」

課題

- ① 基礎固めが重要な3年生0学期に、国語、数学、英語の各教科で、自分がどの分野・単元の復習をする必要があるか、分かっていない生徒がいる
- ② これまでのセンター試験シミュレーションでは得点や判定のみにとらわれてしまい、日々の授業や学習の改善に結びついていない生徒がいる

検討メンバー



ツール提供者

福岡県立
東筑高校

辻本貢士

つじもと・こうじ



岡山県・私立
岡山中学校・高校

鷲見香織

すみ・かおり



鳥取県立
鳥取中央育英高校

前田幸男

まえだ・ゆきお

福岡県立東筑高校では1月、2年生を対象にセンター試験を利用した受験シミュレーションを実施している。3年生がセンター試験の自己採点を行うために登校した日に、国語、数学、英語のセンター試験の問題に取り組み、自己採点した結果を志望大学の傾斜配点を考慮して分析し、3年生0学期の学習計画へつなげるといふものだ。しかし、生徒の中には自己採点の結果に一喜一憂するだけで、3年生0学期の具体的な学習計画に結びつけられていない者もいるという。目標に向けて、何を、どのように努力していくのか、生徒が考えやすいシミュレーションシートへの改訂が求められている。

3年生0学期の
学習計画につなげさせたい

2年生 3学期 受験シミュレーションシート



活用の流れ

- 1 シミュレーション結果をシートに記入し、担任に提出させる
- 2 面談を通して、気になる点などをフィードバックし、3年生0学期の学習をサポートする
- 3 次年度の3学年団や教科団の生徒理解の資料として活用する

前向きな気持ちと
具体的な指針を持たせる

改訂のポイントとして議論の中心になったのは、センター試験のシミュレーション受験の結果を、いかにして生徒のその後の学習へとつなげていくかだ。この時期に生徒に感じさせたいのは過度な危機感でもなければ、無力感でもない。「頑張ればまだまだ間に合う」という前向きな気持ちと、「その端緒として3年生0学期に何をすればよいか」という具体的な指針だという共通認識の下、検討が進められた。そして、「第1志望大学合格のために、自分で考え、自分で決めた学習」に着手する経験がこの時期に必要なという仮説を立て、

シミュレーション受験したセンター試験の結果を、大問レベルで把握し、具体的な学習計画へとつなげていくことにした。なお、学習計画を「これまでの成果」と「これからの課題」という2つの視点で考えることで、教科担当の教師にとつて自身の授業のあり方や家庭学習課題の内容を見直すきっかけにもなるという意見も出された。

なお、東筑高校では2年生に対してセンター試験を利用したシミュレーションを行っているが、ベネッセの2年生2月のマーク模試など、その学校の生徒の状況に合ったアセスメントを利用し、各校に必要な3年生0学期を整備していくべきだということが確認された。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

数値に熱を込め、高い目標の達成を目指す生徒を育てる

福岡県立東筑高校 辻本貢士 つじもと・こうじ



3年生0学期の意識づけは、本校において、大切に行っている指導の1つです。しかしそれは、単に「あと1年」と生徒を焦らせるものではなく、生徒一人ひとりが第1志望大学の入試で求められる力を実感し、今後どのような力をどうやって身につけていくかを考えるものであるべきです。みんなで同じ課題をこなす学習から、弱点克服、得意伸長を意図した「自分の学習」へと3年生0学期に切り替えをスタートできれば、より高い目標を達成できるでしょう。

私は、「自分の学習」づくりは、センター試験対策にとどまるものとは思っていません。自分が何を目指し、これから何をすべきかを考える力こそが、これからの大学、社会で求められるものですから、私たちは、大学入試の枠を超えたより重要な力を生徒に養っているのだと思います。様々なアセスメントを経験する今の高校生ですが、そこで明らかになった数値や評価に対して、教師や仲間の力を借りながら自分で思いや熱を込められる生徒を育てたいですね。

辻本先生プロフィール 教職歴20年。同校に赴任して9年目。教育推進部教務班主任。「自分で考え、自らの意志で行動できる生徒を育てたい」

学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約320人／2017年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、京都大、大阪大、九州大などに161人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ200人が合格。

日々の学習と入試のつながりに気づけば、生徒は変わる

岡山県・私立岡山中学校・高校 鷺見香織 すみ・かおり



この時期に2年生に受験シミュレーションをさせる一番のねらいは、普段の学びと入試がつながっているのだと理解させることです。

その理解をより確かなものにするためには、「どのような学習が今回のシミュレーションでの得点につながったか」を生徒自身に書かせることが大切です。クラスでこの受験シミュレーションシートを使用する場合は、その部分を丁寧に書くように強く求めます。それを面談などで担当が確認して、「毎日の学習が実を結んで、これくらい得点が取れたんだね」と後押しすることで、日々の学習における英単語や、数学の難問に対する取り組み方が粘り強くなってくると思うのです。もちろん、生徒の力だけでは学びの成果や課題にすぐに気づけないかもしれませんが、この時期だからこそ自分と向き合う機会が大切ではないでしょうか。

3年生0学期に、ほかと比べるとはななく、自分自身の課題を見据えて、現実を踏まえた対策を考えさせることができれば、きっと生徒は大きく変わるはずですよ。

鷺見先生プロフィール 教職歴18年。同校に赴任して13年目。高校1学年主任。国語科。「人に優しく、己に厳しく、勉強はたゆみなく」

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約150人/2017年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、京都大、神戸大、岡山大、九州大などに44人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、中央大、東京理科大、同志社大などに延べ230人が合格。

自己を振り返るための力を、平素の学習の中で養う

鳥取県立鳥取中央育英高校 前田幸男 まえた・ゆきお



本校では、国公立大学志望の2年生は、1月中旬に2年生2月マーク模試の過去問題を使って弱点把握を行い、2月マーク模試、3年生6月マーク模試までの学習計画へとつなげます。模試で思うような成績が取れない生徒が途中で諦めてしまわないためにも、「今の自分に身についている力は何か」「もう少しで解けた大問はどれか」などとプロセス思考の振り返りが重要です。現時点では合格が難しくても、本人の意識の持ち方や教師の声かけによって、見事な逆転合格を果たす生徒は出てくるのですから。とは言え、生徒にとって学力面での自己分析は簡単ではありませんから、日々の授業の小テストなどでの自己分析を教師が設定し、生徒に習慣づけることが大切だと思います。

就職希望の生徒にも3年生0学期は必要です。卒業生に入社後に必要な力を語ってもらいながら、就職試験がピークを迎える3年生の秋までにどのような学び方、生活習慣を確立していくのかを生徒自身に考えさせる場をつくりたいです。

前田先生プロフィール 教職歴19年。同校に赴任して13年目。進路指導部。数学科。「感謝の気持ちが行動の原動力」

学校プロフィール 全日制/普通科(普通コース、体育コース)/共学/1学年約160人/2017年度進路実績(現浪計)/国公立大は、和歌山大、鳥根大、山口大などに9人が合格。私立大は、京都産業大、立命館大、近畿大などに延べ41人が合格。短大進学25人、専門学校進学51人、就職22人、公務員5人。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。



世界各国の学生と英語で学び、 世界で活躍する科学者をを目指す

東北大学 工学部 機械知能・航空工学科 国際機械工学コース



世界中から集まった仲間と 英語で工学教育を学ぶ

日本にいながら、すべての授業が英語で学べる環境です。日本人はもちろん、世界各国から日本の文化や科学技術に興味を持って日本で学びたい学生が集まっています。(管さん)



学外での発信に向けた 「発信力」を高める

授業では、発表や議論のトレーニングを重ねます。その成果の場として、4年次の9月には、国内の学会で卒業研究の内容についてプレゼンテーションを行いました。(范さん)



「世界中に同級生がいる」という グローバルなネットワークを構築できる

国際機械工学コースには、10 개국以上の学生が在籍し、授業中は皆、積極的に議論しています。また、授業外での交流の機会も豊富です。(Jowesh さん)



工学研究科
ファインメカニクス専攻
Jowesh Goundar
ジョイッシュ・ガウンダー
フィジー出身。エンジニアとして母国の電力事業への寄与を希望。



工学部
機械知能・航空工学科4年
范 怡晴
ファン・イキング
中国出身。大学院卒業後、研究者となることを志望。



工学部
機械知能・航空工学科2年
管 一兆
カン・イザオ
中国出身。大学院への進学を志望。

すべての工学教育を 英語で学べる環境

東北大学 工学部 機械知能・航空工学科は、最先端の機械工学分野を幅広く扱い、「ロボティクス」「航空宇宙」「エネルギー環境」など7コースを設置している。同学科の特徴は、これらのコースのほか、学科内のすべての授業を英語で学べる国際学士コース「国際機械工学コース」を設置している点だ。

同コースは、世界各国の学生がともに学ぶ中で、グローバルな科学者や技術者を育てることを目指し、2011年に設置された。17年度からは、日本人学生の受け入れも開始し(※)、2人が入学した。そのう

* 2017年度から同コース入学希望の日本人を対象とした秋入学のグローバル入試を2月と6月に実施。秋入学で問題となるギャップターム(合格後の4~9月)では、入学後の学習をスムーズにスタートできるよう英語研修、数学物理演習などのプレ教育を実施。

ちの1人である1年生の加藤里彩さんは、「英語力を鍛えながら、機械工学を学びたいと思いました。授業はすべて英語で行われますが、海外進学よりも学費が抑えられることが魅力でした」と入学の動機を語る。

同コースの1学年の定員は約15人で、中国や韓国、インド、タイ、エジプトなど10か国以上の学生が在籍。授業だけでなく、日々の生活でも共通語となる英語でコミュニケーションを図り、お互いに理解し合う姿が見られる。2年生の菅一兆さんは、「文法の使い方などに間違いがあってもお互い様という雰囲気積極的に会話しています。それが学びを深め、英語力を高めることにつながっています」とその様子を話す。

フィジー出身のJowesh Goundarさんは、母国の大学を卒業した後に1年間、電力会社に勤務した後、国費留学生として来日した。

「最先端の技術を英語で学べる点にひかれました。電力事情がよくなりたいフィジーで、安価かつ確実な電力供給を実現するために、カーボンナノマテリアルを用いた太陽光発電の研究に取り組んでいます」

同コースの一部の授業は、コース

受講生だけではなく、すべての日本人学生にも開放し、単位取得も認められている。学生のやる気次第で、日常の授業を通して、英語力の向上や留学生との交流を図れる教育環境だ。

1年次からグローバルな 資質・能力を育成

東北大学は「実学重視」を掲げており、同学科でも1年次から、講義で得た知識が、社会でどう役立つかを実感できる実験や演習を豊富に用意している。4年生の范怡晴さんは、次のように述べる。

「計測工学の授業で実際に球速を測ったり、3Dプリンターを操作したりと、知識がどう役立つかを感じられる授業が多くありました。そうした学びを通して、3年次からの研究室で何を研究するかというイメージが固まってきました」

並行して、1年次から重視しているのが、発表や討論の能力育成だ。今後の科学者や技術者には、世界中の人と協働して問題解決を図る力が、ますます求められるようになるという考えから、プレゼンテーションやディスカッションを行うなど活動を各学年で取り入れている。

「プレゼンテーションでは、自分が十分に内容を理解していないと、相手に伝わらないことを痛感しました。論文を読み、分かったつもりになって資料作りをしていたことを反省しました」（菅さん）

海外留学しやすい カリキュラムを展開

また、同学科はクォーター制で、どの科目も週2回授業を実施し、2か月間という短期間で単位が取得できる。例えば、4・5月に集中的に授業を受け、6月から夏休みにかけて海外留学をするなど、学びの流動性を高められる。そのため、同学科の学部生の約1割は留学を経験するという。1・2年生は語学、3・4年生や大学院生は研究を目的とした留学が多い。

「大学院に進学後、研究テーマである材料分野に強いアメリカの大学院に交換留学したいです」（范さん）
留学生の多くは、同大学や海外の大学院に進学し、将来は母国で活躍することが期待される。こうした留学生の熱意を日本人学生にも波及させ、世界で活躍する人材の育成に力を入れていくことを目指している。

大学の思い

各国の学生が切磋琢磨し 積極的に学びを深める



工学部
機械知能・航空工学科
教授
三浦英生
みうら・ひてお

これからの科学者や技術者は、個人として優秀なだけでなく、世界中の人々と協力する中で、一人ひとりの強みを生かして、複雑な問題を解決していく力が必要です。そうした国際的な協働においてリーダーシップを発揮し、活躍できる若者の育成が、本学科の目的です。

そうした世界をリードする人物を目指すには、英語力に加え、多様な文化や価値観を尊重し、協力し合う力を身につける必要があります。国際機械工学コースでは、世界各国から集まった学生が切磋琢磨し、お互いを理解し合う経験を重ねながら、世界最先端の研究を進めていく中で、そのような力を身につけていくことができます。また、卒業後も、ともに学んだ同級生が世界中にいて、いつでも連絡を取り合えるという状況は、貴重な財産となるでしょう。

各国から集まった留学生の学びへの姿勢は、非常に積極的です。日本人の学生も、彼らとともに学ぶ中で、より積極性を高めていってくださることに期待しています。



日中韓の3つの大学を移動して学び 東アジアの架け橋となる人材を育成

立命館大学 文学部「キャンパスアジア・プログラム」

他国の学生とともに留学し、 刺激を受け合いながら学ぶ

中国人学生と一緒に、韓国に留学しました。皆、初めての韓国留学でしたが、中国人学生の授業への姿勢はとても積極的で、自分の学びへの姿勢を見直しました。(滝宮さん)



3か国の学生が、お互いの言語と 文化を学び合うプログラム

母国以外の2か国の学生と交流し、理解を深め合う中で、母国についても相対化して捉えられるようになりました。(楊さん)

母国以外の2か国を 2年間で2周して学ぶ

2年次の前期の韓国留学では、語彙力の不足を実感。3年次の韓国留学では、もっと深いコミュニケーションを取れるようになりたいです。(滝宮さん)



文学部
人文学科2年
滝宮七海
たきみや・なみ

兵庫県・神戸市立葺合高校卒業。留学経験を生かし、国際的な仕事を志望。



文学部
人文学科1年
今井詩文
いまい・しづみ

京都府・私立立命館中学校・高校卒業。東アジア各国をつなぐ仕事を志望。



広東外語外貿大学
2年
楊 天任
よう・てんにん

中国湖南省長沙市長郡中学卒業。将来はアジアで活躍する工業デザイナーを目指す。

2年間で中国と韓国へ 半年ずつ2回留学

立命館大学 文学部の「キャンパスアジア・プログラム」は、東西大学校（韓国・釜山）、広東外語外貿大学（中国・広州）と共同運営する国際教育プログラムだ。日中韓の言語に通じ、それぞれの文化を理解し、3か国をつなぐリーダーの育成を目指して、2012年度にパイロット版プログラムが始まり、16年度から常設化された。各大学とも1学年20人が定員で、立命館大学は入学前に選抜を行う。人文学科1年生の今井詩文さんは、「韓国文化への興味と、留学への憧れもあり、本プログラムを希望しました」と述べる。

プログラムの最大の特徴は、2・3年次に2か国を2周する「移動キャンパス」だ。立命館大学の学生の場合、2・3年次に半年間ずつ韓国と中国に留学するため、計2年、海外で学ぶことになる。

1年次は、留学のために中国語・朝鮮語を集中的に習得する。

「語学の授業は、留学生が参加したり、ウェブ遠隔会議システムで現地学生と交流したりと、実践的な内容です。来年度から留学するという明確な目標があるため、熱が入ります」（今井さん）

さらに、東アジアの歴史や文化など人文学の基礎とともに、コミュニケーションやプレゼンテーションスキルなどを学び、留学に備える。

3か国の学生が刺激し合い 相互理解を深めていく

2年次には、2か国に半年間ずつ1周目の留学をする。現地での学びの中心は、語学学習だ。文法などの基礎に加え、会話やプレゼンテーションといった実践的な授業を受け、語学力アップを目指す。

人文学科2年生の滝宮七海さんは、「留学先の韓国では、中国人学

生の朝鮮語のレベルが高く、負けられないという気持ちになりました。最初は朝鮮語に耳が慣れずに苦労しましたが、1か月ほど経つと、かなり聞き取れるようになり、会話もできるようになりました」と話す。

さらに、現地の歴史や文化について講義を受け、ディベートなどの演習を行う。例えば、各国の学生が母国以外の立場に立つて議論する中で、相互理解を深めていく。広東外語外貿大学2年生の楊天任さんは、「尖閣諸島問題について日本の立場から考えるうちに、自分の考えが変化し、物事を客観的に捉える大切さを痛感しました」と語る。

また、滝宮さんは、「ニュースなどを見ていると、中国や韓国には、『反日』意識を持つ方が多いというイメージもありますが、個人によって考え方が異なることを知りました」と述べる。

寮生活でも、現地の学生や留学生間で交流し、相互理解を深めていく。滝宮さんは、「ルームメイトの中国人が夜遅くまで勉強していることに驚き、自分もやらなくてはと刺激を受けました」と話す。

「中国人に比べ、日本人は待ち合

わせ時間などの約束を大切にすることを知り、お互いの生活や考えの違いにも触れられました」（楊さん）

1周目の留学の反省を基に 2周目の留学を充実させる

3年次に実施する2周目の留学で、1周目の成果と課題を生かすことができるのが、本プログラムの大きな利点だ。1周目で自分の力不足を痛感し、より勉強に熱心になる学生の姿も見られる。2周目の留学では、語学力が高まり、人間関係も築かれていたため、ディスカッションなどで深い議論ができるという。

「1周目の韓国留学では歴史や文化をあまり理解しておらず、ディスカッションであまり意見が出せなかったため、次はしっかりと勉強して臨みたいと思います」（楊さん）

パイロットプログラムの卒業生は、外資系企業やインバウンドに関わる広告会社などに就職し、グローバルに活躍している。

「留学前は将来の目標は決まっていまなかったが、1周目の留学を経験する中で、日本語教師など語学力を生かした国際的な仕事に就きたいと思っています」（滝宮さん）

大学の思い

3か国の関係性の中で 自分を対象化して成長する



文学部 准教授
キャンパスアジア・
プログラムマネージャー
廣澤裕介
ひろさわ・ゆうすけ

「キャンパスアジア・プログラム」は、3か国の大学が合同で行っている点がポイントです。距離的にも近く、政治・経済でもつながりが深い中国や韓国の文化や歴史、社会を学び、違いを認識しつつ相互理解を深めることをねらいとしています。そのため、本プログラムの授業では、3か国の学生が混合されたチームをつくり、ディベートやプロジェクトなどに取り組みます。

例えば、ディスカッションでは、日中韓の関係性も考慮する必要があります。意見を調整し、まとめる力が育ってきます。日本人学生は、中韓の学生が積極的に自分を表現する姿に刺激を受けよう。一方で、客観的な立場から相手の意見を聞き、時には中韓の学生の仲介をするなど、調整能力の高さは日本人学生の強みだと思います。そうした違いは、2か国ではなく、3か国の学生が実際に交流し、自分を対象化することで見えてくることです。

また、各国にできる友人も貴重な財産となります。3か国での学びを通して、東アジア社会の安定と発展に貢献する人材が育つことを期待しています。

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 日賀優一

「答えが1つではない問い」を考える高校生向け対話型ワークショップを開催する「三四郎の学校」事務局長。本誌2016年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。

テーマ

感動・気づきをもたらす講演会

講演会がつまらない原因は、講師と参加者の双方にある

これからの授業のあり方などを考えるヒントを得るために、校内研修として講師を招き、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」などをテーマにした講演を聞く機会が増えているのではないのでしょうか。また、日々の学習を社

会と結びつけるために、社会人などの講演を生徒、教師が聞く取り組みも多く見られます。しかし、講演会の中には期待していた感動や気づきを得られないケースもあります。そのような講演会になってしまう原因はいくつか考えられます。



講師側の原因

- ◎その学校の教師、生徒の実情を理解せずに話している
- ◎長時間、一方的に話している
- ◎抽象論ばかりで具体的なエピソードに乏しい

参加者側の原因

- ◎誰が何を話すのか、理解せずに講演会に臨んでいる
- ◎課題意識を持たずに、漫然と受け身のまま聞いている
- ◎適切なタイミングで質疑することができない



参加者は課題意識を持って講演会に臨んでいるか？

講演会の成否は講師にかかっていると思われがちです。特に、講師選びや登壇交渉などを苦勞しながら進めてきた場合、「この講師を呼べただけで成功だ」「あとは講師に任せればよい」といった気持ちになりがちです。

しかし、講演会当日までに企画者や講演会の司会・進行役が取り組むべきことは数多くあります。中でも、最も力を入れたいのが、参加者である先生方や生徒たちの、講演会への期待感を高めることです。というのも、授業改善の研修会や進路学習としての講演会などでは、管理職など一部の教師を除き、大半の人が「誰が、何を話すのか」をよく理解していないまま会場に足を運び、講演会が始まることあるからです。多忙な先生方が役割分担をしながら講演会を開催するのですから、事前の告知に手間ひまをかけられないのは仕方ない面もありますが、そのような参加の仕方では、参加者は講演というエンターテインメントの受け手にとどまってしまいます。各自が課題意識を持って講演を聞くよう、企画者や司会・進行役による仕かけが必要です。

本コーナーでは、学校現場ですぐに実践することができる会議・研修の進め方や、運営の際の具体的なポイントを紹介してきました。実際に先生方が参加する会議・研修の場で、これまで取り上げてきたような配慮や工夫がなされると、参加者の学びや考えはどのように深まるのか、今回は実践事例をご紹介します。

感動・気づきを
もたらす
講演会

司会・進行役による仕かけ「松・竹・梅」

参加者が講演会に興味を持って参加し、講演の内容を自分の課題と結びつけ、その後の行動変容へとつながるようにする、講演会の企画担当者や司会・進行役による仕かけを難易度別に紹介します。

梅
初級

興味を高める情報を前もって提供する

講演会という「学習活動」に対する準備ができるように、誰が、何を話すのか、なぜそのような講演会が設定されたのかを説明します。

① 講演内容を事前にチラシなどで告知する

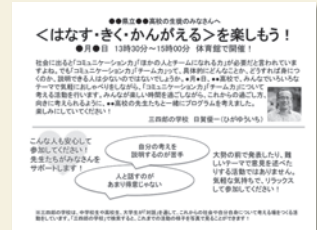
講演内容をチラシなどにまとめて、事前に告知することで、参加者は講師について調べたり、なぜそのような講演会を学校が企画するのか、ねらいを考えたりすることができます。

② 講演の「前説」で、ねらいを説明する

たくさんの配布物がある学校では、チラシが参加者の目に届かないことも考えられます。講演の前に司会・進行役が講演会のねらいや、講演を通して考えてほしいテーマについて述べることで、参加者は「聞くポイント」をしっかりと意識して講師の話の聞くことができるようになります。

◎チラシの例

高校で実施した生徒向け「対話」のワークショップの案内。ねらいとともに、「話し下手でも大丈夫」と不安を解消する説明も行いました。



竹
中級

集中が求められる課題を参加者に与える

講演をただ聞くだけではなく、聞いたことを基に作業をすることが事前に明らかになっていれば、参加者はより集中して講演会に臨みます。

① ワークシートで聞くポイントを示す

講演会の前にワークシートやアンケートを参加者に配布し、講演会後に提出してもらうようにします。自由記述ではなく、講演会を通して考えてほしい項目を明記したワークシートを配布することで、聞くポイントが明らかになります。

② 質疑や謝辞の担当を事前に決めない

講師への質疑や謝辞を誰が行うかを事前に決めることで、「自分は集中して聞かなくても大丈夫」という油断を参加者に生むことになります。自由に発言してもらうのがベストですが、なかなか手が挙がらないことが予想される場合は、参加者に番号を割り振り、講師にその番号で指名してもらうのも一案です。

◎ワークシートの項目例

- ・共感できたことは何か
- ・違和感を持ったことは何か
- ・もっと聞きたいと思ったことは何か
- ・明日からの校務にどのような変化をもたらそうか

松
上級

自校に合った講演会を講師と一緒につくる

講師に参加者（教師、生徒）の状況や課題を理解してもらうほど、その学校に合った講演会をつくることができます。

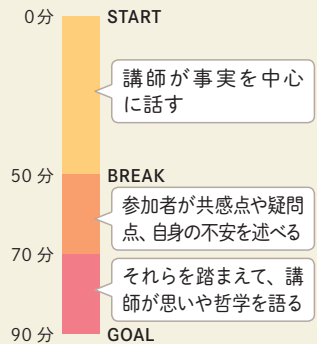
① 質疑応答を途中で挟み、講演会を「ナマモノ」にする

1つの挑戦を成し遂げた講師による講演会の場合、まず、その挑戦に関する事実を話してもらい、途中で参加者に質問を募ります。講師には、質問を通して参加者を理解した上で、さらに思いや哲学を語ってもらいます。講演会の途中で学校の生の声をぶつけることにより、講師から自校に合った言葉を引き出します。

② 講演内容や投影スライドを事前にチェックする

事前に講演内容の概要を教えてくれたり、投影スライドを見せてくれたりする講師であれば、「この部分を本校では詳しく話してほしい」「この部分は本校では既に終わっている内容だ」などと、講師に要望や状況を伝えることができます。

◎講演会を構造化する流れの例
(90分の場合)



講演内容と自分の課題とを 結びつけられる仕かけを

講演会の講師は、参加者にとっては今の自分とは距離のある、すぐには手が届かない人であり、だからこそ、その言葉に耳を傾けます。しかし、講師の言葉に講演会中は納得しても、時間が経つにつれて、「自分とあの講師とは置かれていて環境が違う」など自分の中に言い訳を探してしまい、いつの間にか熱が冷めてしまうことは、実はよくあることです。それは講演会の出来不出来によるものではなく、参加者の中に、自分が直面する課題に講師の話からヒントや励ましを得ながら取り組んでいこうという気持ち、つまり「聞く準備」が十分にできていないことが原因の1つと考えられます。

講演会の成否は、講演そのものを楽しめるかどうかではなく、講演会後、いかに自分の中に変化や成長を生めるかによって決まります。参加者が自分の課題と講師の話をしつかりと結びつけることで、感動や気づきが深く心に刻まれる講演会が実現されます。

2017年6～10月号までの3号を通しての特集へのご意見

「差異」に着目して、発問を見直す

10月号の特集は、「資質・能力は特定の教科・科目のみで育まれるものではないからこそ、学校全体で指導や評価を分担する」ことの意味を問い直すよい機会となった。生徒一人ひとりの小・中学校までの学習・生活経験をしっかり把握し、それを基に高校3年間で伸ばしていくためには、大学入試の変化も踏まえつつ、教育内容や方法、授業と評価のあり方の再点検が必要だ。また、「差異」に着目した発問については、発問の構成を中心に考えてきた自らの授業のあり方を見直す必要性を感じた。「なぜ」を授業の中心に据え、どのような言葉で生徒に問いかけるのかに加え、生徒たちの答えの「差異」を深く掘り下げていく授業を目指したい。徳島県 匿名希望

生徒にも教師にも必要な教育活動計画

教科指導だけでなく、学校行事や部活動なども含めた教育活動全体で生徒の「資質・能力」を育成する重要性を再認識した。半数以上の生徒が卒業後に就職する勤

務校では、就職の内定が出るまでは授業にも学校行事にも真剣に取り組むが、内定が出ると学校行事などは「楽しむこと」を重視する生徒が多いように感じる。その点、教育活動計画の作成は、生徒だけでなく教師にとっても、学校行事の目的を認識するために重要な取り組みで、参考になった。今後は、各教育活動で育成を目指す設定した「資質・能力」が、本当にその活動で育成できているのかどうかを評価する仕組みが、一層重要になるだろう。

静岡県立御殿場高校 松山陸

教育目標を前面に出した学校紹介も重要

山梨県立吉田高校の実践は、大変参考になった。受験校を決める中学生にとって、吉田高校では8つの力の育成を目標に掲げて授業や学校行事が行われていることが明確に分かるので、志望校選びの指針になり、同時に安心して同校を受験できるだろう。今後、進学実績だけでなく、教育目標を前面に出した学校紹介が求められる時代になると思った。福井県立道守高校 松田透

教育ちよこトーク

テーマ

2018年の抱負



- 生徒たちの自主性を促すためにも、まず自分が計画的に行動できるようになる。愛媛県
- 今年還暦を迎えたが、経験に頼らず、常に新しい教育を目指したい。福島県

- スクラップ&ビルド。仕事をビルドすることはもちろん、思い切って仕事をスクラップする努力！静岡県
- 異動希望が殺到するような学校に変革させる。愛知県

『VIEW21』高校版 読者モニター を

募集しています！

『VIEW21』高校版編集部では、「現場とともに考える」情報誌をつくるため、『VIEW21』高校版に対するご感想やご意見をお寄せいただける先生方のご応募をお待ちしています。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、下記のいずれかの方法でご応募ください

- ① 下記2次元コードを読み取ってアクセスいただき、必要事項をご記入の上、ご送信ください。



- ② 学校名、お名前、分掌、ご教職歴をご記入の上、下記の e-mail アドレスにご送信ください。

view21_since-1975@
@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉『VIEW21』高校版・読者モニター募集でご提供いただく個人情報は、アンケートの集計・分析による VIEW21 誌面評価、企画開発、VIEW21 誌面・ウェブサイトへの掲載、教育情報の提供ならびに謝礼の発送の目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。
(株) ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

編集後記

今号の「指導変革の軌跡」で取り上げさせていただいた青森県立五所川原農林高校の取材では、記事でも紹介した「GLOBAL G.A.P.」の公開模擬審査を見学しました。公開模擬審査には、県内外から約130人の農業関係者が参加されていて、注目度の高さがうかがえました。模擬審査後の生徒へのインタビューでは、「人前に立つのが苦手でしたが、認証取得の過程で力がついた」と自信を持って答えてくれ、それを聞いていた先生方は生徒の成長をうれしく思っている様子でした。何事にも果敢に挑戦する生徒たちが、どのような日本の農業の未来をつくっていくのか……今後の活動に期待です！（廣田）

VIEW21 高校版 2018 2月号

次号は 2月13日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No.005

静岡県・沼津市立沼津高校・中等部

谷野公彦先生

やの・きみひこ

◎教職歴23年。同校に赴任して7年目。教務主任。数学科。

静岡県・沼津市立沼津高校・中等部 全日制／普通科／共学／1学年約200人／2017年度入試合格実績(現役のみ):国公立大は、北海道大、筑波大、横浜国立大などに22人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大などに延べ173人が合格。



初 任校では、たくさんの先生方から、様々なことを教わりました。もちろん、経験が浅い私なりに、授業、クラス経営、部活動などと、それぞれの指導場面で一生懸命に取り組んでいました。でも、今改めて振り返ってみると一つひとつの指導が、それぞれの生徒を理解し、育てるものとして十分に結びついてはいなかったかもしれません。

そんな私に対して、いろいろな先生が折に触れて「生徒への接し方」をアドバイスしてくれました。先生方がそれぞれの言葉で私に教えてくださろうとしていたのは、「生徒に大きな影響を与える教師として、『**もっと自分に責任を持って**』ということだと私は気がきました。当時、教科指導に力を入れていた私が、「生徒指導、進路指導、教科指導はすべてが互いにつながっている。だから生徒指導の際には、生徒に集団の中で学び、働くという進路指導についても意識させる必要があり、教科指導では、生徒の生活面の変化などの生徒指導にも目を向けなければいけない」と、1人の生徒を多面的に見る教師の責任の重大さを理解したのです。

先輩方からアドバイスをいただいた場面は、今でも鮮明に覚えています。それは、学びの価値が私の成長とともにさらに大きくなり、その言葉が発せられた瞬間がより深く心に刻まれるからかもしれません。他者からの学びが自分の血肉として、変化していく時間と言えるでしょう。

他 者を育てる言葉は、発する側と受け取る側の関係で変わってくるのだと思います。それは、

教師間はもちろん、教師と生徒の関係でも同じです。同様の指導でも、この生徒にはこの言葉で響くけれど、この生徒には別の言葉の方が響くといったことはよくあります。また、同じ生徒への指導でも、タイミングが違えば選択すべき言葉は全く変わります。指導には、「これしかない」という正解が存在せず、時に誤解やすれ違いも起こってしまいますが、それでも恐れずに、自分に責任を持って思いを語り続けるのが、「教師」という仕事なのだと思います。

学校も1つの社会ですから、そこにはいろいろな生徒、先生がいます。何事にも熱い人もいれば、ドライな人もいます。特に最近は、生徒も教師もそうした差異が大きくなっている気がします。それでも私は、「そういう人だから仕方ない」「言っても無駄」などとは思いたくはありません。差異は認めた上で、「この学校では教師も生徒も、誰もが少しずつでも変わりたい、よくなりたくて願っている」と信じて、目の前の生徒、そして同僚へのよりよい言葉を探していきたいと思っています。「いつか、きっと伝わる」という信頼を持ち続ける大切さも、私がこれまでの教師生活の中で学んだことの1つです。

社 会は今、個を尊重する時代です。それは大切な考え方だと思います。ただ、個を尊重することと、それぞれの個が孤立してしまうことは決して同じではありません。どんな声かけが効果的のかなどはまだまだ勉強中ですが、今後も先生方と同じ方向を向いて、日々努力していきたいと思っています。

英語4技能を多角的に測定する新・英語検定

GTEC CBT

Global Test of English Communication Computer Based Testing

SPEAKING

WRITING

LISTENING

READING

特長
1

GTEC CBT のスコアは
大学入試に活用できます。

特長
2

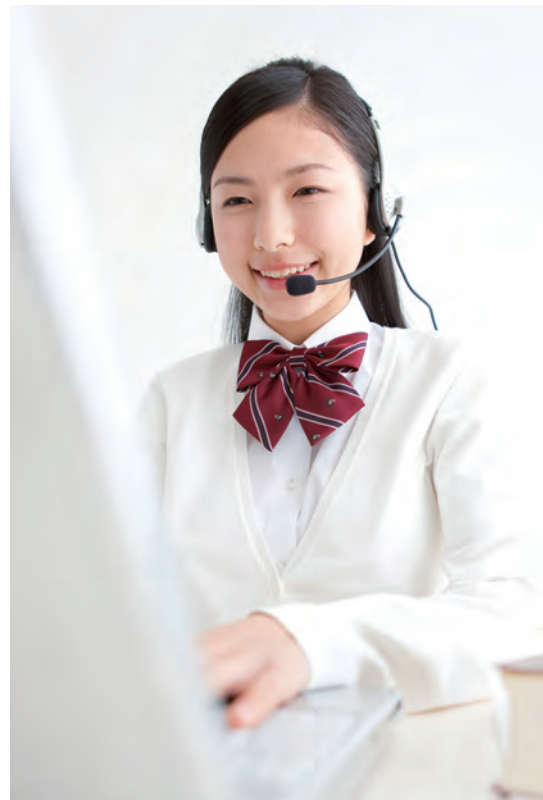
「留学の成果測定」や
「英語力の育成」にも
ご活用いただけます。

特長
3

高校生に最適な出題。

特長
4

全国47都道府県の
公開会場で受検可能です。



2017年度
検定日

2018年
3月25日

申込期間

2018年1月6日～2月22日
※年度内2回まで受検可能

検定料

9,720円 (消費税8%込み)

2018年度以降入試活用予定大学は256大学

※2017年8月31日時点の情報です。

スコアが活用できる大学やその他の情報は公式Webサイトをご覧ください。

詳しくはGTEC CBT
公式ホームページをご覧ください。

<http://benesse-gtec.com/cbt/>

GTEC CBT

検索

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume5 2017年12月号
 2017年12月11日発行/通巻第367号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
 VIEW21編集部 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
 ©Benesse Corporation 2017

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17